

創世の7日間

創世記より御国の完成に関する黙想

鈴ヶ峰キリスト福音館

聖書研究会

この黙想を読む方へ

この考察は、創世記の七日間を、聖書全体が証しする御国の完成という光のもとで黙想するための助けとして記しました。

創造の出来事は、万物のはじめを語るだけではなく、その存在が何のために造られ、どこから来てどこへ向かうのか——その存在の理由が新約聖書において証しされた答えが、創世記の神の業のうちにとどのよう示されているのかを問い求める者を、御霊は導いてくださいます。聖書に並べられた多くの不思議な事柄は、聞く耳のある者を呼び起こし、神ご自身が語りかけ、その栄光を讃える者へと導くために、主が御心によって置かれたものだ信じます。

創造の七日間は、キリストにおける贖いと、終末における完成へとつながる一本の救済史として語られているとの黙想です。ここで扱われる内容は、知識を積み上げるための注解ではありません。創造・贖い・完成が重なり合う象徴を通して、御言葉が示してきた真理の深みを受け取るための黙想です。

象徴は、一つの真理が角度を変えて照らされる光のように、異なる響きをもって届きます。そのため、この黙想は急いで理解する必要はありません。むしろ、心に留まる言葉の前で立ち止まり、御言葉が照らす光の中で、御子において為される神の御業をゆっくり味わう読み方がふさわしいものです。

創造の各日には多くの象徴が登場しますが、そのすべては最終的に、「キリストと花嫁が一体となる」という御国の完成を経て、神の栄光へと向かっています。細部に迷うときには、「これはどのように一体の人につながるのか」という問いを置いてみてください。その問いは、創造から終末までを貫いて理解する助けとなります。創造の出来事、イスラエルの歩み、キリストの十字架、そして終末の完成——これらは別々の物語ではなく、同じ御計画が、異なる時代と象徴を通して証しされる神の業です。

■エペソ人への手紙

- 1:3 私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神はキリストにあって、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。
- 1:4 すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前から彼にあって選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。
- 1:5 神は、みむねとみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられました。
- 1:6 それは、神がその愛する方において私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。
- 1:7 この方において私たちは、その血による贖い、罪の赦しを受けています。これは神の豊かな恵みによることです。
- 1:8 この恵みを、神は私たちの上にあふれさせ、あらゆる知恵と思慮深さをもって、
- 1:9 みこころの奥義を私たちに知らせてくださいました。それは、この方において神があらかじめお立てになったみむねによることであり、
- 1:10 時がついに満ちて、実現します。いっさいのものがキリストにあって、天にあるもの地にあるものがこの方において、一つに集められるのです。
- 1:11 この方において私たちは御国を受け継ぐ者ともなりました。みこころによりご計画のままをみな行方うの目的に従って、私たちはあらかじめこのように定められていたのです。
- 1:12 それは、前からキリストに望みを置いていた私たちが、神の栄光をほめたたえるためです。
- 3:9 また、万物を創造した神のうちに世々隠されていた奥義の実現が何であるかを、明らかにするためです。
- 3:10 これは、今、天にある支配と権威とに対して、教会を通して、神の豊かな知恵が示されるためであって、
- 3:11 私たちの主キリスト・イエスにおいて成し遂げられた神の永遠のご計画によることです。
- 5:26 キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、
- 5:27 ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。
- 5:31 「それゆえ、人は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となる。」
- 5:32 この奥義は偉大です。私は、キリストと教会とをさして言っているのです。

■コロサイ人への手紙 第1章

- 1:15 御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。
- 1:16 なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。
- 1:17 御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。
- 1:18 また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めてであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。

御国の完成に関する黙想

鈴ヶ峰キリスト福音館

Message by Nobumasa. H

2025. 12. 20 ~ 2026. 1. 23

—創世の第2日目 大空の上の水と下の水—

創世記1章6節～8節

神は仰せられた。「大空が水の真ただ中であれ。水と水との間に区別があれ。」

神は大空を造り、大空の下の水と、大空の上の水とを区別された。そのようになった。

神は大空を天と名づけられた。夕があり、朝があった。第二日。

I. 第二日目の創造と「大空（רַקִּיעַ raqia ラキア：大空・広がり）」

創世記第二日目には、神が「大空（רַקִּיעַ ラキア）」を造り、上の水と下の水を分け、大空を「天」と名づける場面です。

神は、すべてが水である世界に対し上下に分けられました。上の水は、空の下ではないため雲や雨のことである、と言い切るだけでは説明できません。地上的なものではない天上的な領域を考えることとなります。象徴としての意味を捉えるなら、天的領域としての神の側の領域についての関係性を黙想します。すなわち、神の支配、秩序、神の命の源、神の働きの源・・・祝福の源泉であったり、後に聖書が語る「上からのもの」と区別されるものの原型です。

II. 水（מַיִם mayim マイム：水）の存在と御言葉の関係

水は初めから存在しています(2節)。被造物として登場しませんでした。(※補足1)

「初めからあったもの」、これは、「はじめに言葉があった」(ヨハネ1:1)というヨハネ福音書の書き出しに紹介されるロゴスと同じ態様です。水はしばしば聖書では神の言葉を象徴しますが、ここでも、そのことについて洞察する必要があります。ペテロの手紙には「この世界は水によって、みことばによって成った」と証しされています(Ⅱペテロ3:5)。ここでのことばは、神の創造の言葉、神の約束の言葉、神のみことば(דְבָרָה dābār ダバル)です。

水は、いのちを与えるものであり、形作るものであり、神の働きの媒体であり、創造の初めとともに存在する創造の素材のように描かれます。神の御計画・意志(ロゴス)が初めに存在しているときに、水は形を持たず区別されない世界の中に存在しています。そのなかで、第一日目に主は「光があれ」と宣言し、光がありました。そして、第2日目に神の御意志・みことばは、世界の創造のすべてを形作る設定、前段階を備えられました。神のご目的に向けた御計画を備え整えられました。

III. 下の水と上の水の象徴的意味

このように考えると、下の水とは、地に現れた御言葉(成就したもの)であり、地上に現れた御言葉とは、実際に受けている祝福、神の創造の形が現れている領域、約束がすでに形となったもの、見える世界における御言葉の成就(דְבָרָה dābār ダバル：言葉・出来事)として捉えること

ができます。

第三日目には、下の水が集められ、地が現れ、地が実を結ぶこととなります。つまり、下の水は、みことばが「形」として顕れた世界の様相です。そして、上の水は、御言葉の源、成就前の領域、そしてまた、天上の蓄えです。すでに存在するが、地には現れていないもの、天上に属する領域であり、御言葉の源泉、祝福の蓄え、成就前の約束の領域を指すものであり、御言葉の「天的形態」を象徴します。それは、まだ地に降りていない祝福であり、神の側に隠されている完成形です。天においては成就済みのもの（地では未成就）であり、「上から来るもの」の源泉です。つまり、創造において、第二日目は、御言葉の「天的形態」と「地的形態」が区別されました。このことは、創造の構造そのものが御子キリストに収束することを意味しています。天にあるもの、すでに完成しているもの、神の側に蓄えられたもの、まだ地に現れていないもの。これらはすべて、「キリストのうちに隠されているもの」（コロサイ 2:3）として語られます。「地にあるもの」とは、キリストによって現れた成就です。地に現れた御言葉、形となった祝福、神の創造の実際の現れ、すでに成就したものとして、キリストによって地に現れたものです。

エペソ 1 章 10 節 「時が満ちるにしたがって実現される御計画とは、天にあるものも地にあるものも一切のものが、キリストにあって一つに集められることです」

コロサイ 1 章 16-17 節 「万物は御子によって造られ、御子のために造られた。万物は御子にあって成り立っている」

ヨハネ 1 章 14 節 「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた」

これは、天にある御言葉（上の水）と、地に現れる御言葉の成就（下の水）という二重構造が、キリストにおいて結び合わされるという創世記の構造の成就です。

ヨハネ 3 章 31 節 「上から来られる方は、すべての上におられる」

ピリピ 2 章 10 節 「天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものが、すべてイエスの御名にひざをかがめる」と語ります。

（「地の下にあるもの」は、深淵・死者の領域においてなお残るキリストの憐れみの現われとしての希望を考えることにつながります。「地の下にあるもの」は、ノアの日深淵の源が裂けたように、キリストの主権が裁きと憐れみの両側面において、死者の領域にまで及ぶことを示す象徴として黙想できます。この深淵の領域に、キリストは降られ、「ノアの日に従わなかった囚われの霊たち」に宣べ伝えられた（1ペテロ 3:19-20）とペテロは証しました。
→（補足. 2）

これらのみことばは、世界の創造のはじめに、上の水と下の水とに分けられたように、キリストにある新しい創造の御計画とご目的が、分けられた上の水である天に蓄えられた御言葉と、下の水である地に現れた御言葉の成就とが、やがて、キリストにおいて完成・統合することを示しています。なぜなら、キリストの日は、ノアの日になぞらえられるからです。

IV. ノアの日とキリストの日の関係

主自身が語られたように、「ノアの日」は「人の子の現れの日」の型となっています。その日

には、天にあるものが地に現れます。ノアの日には、上の水（天の窓）が開き、下の水（深淵の源）が裂けました。天上の水と地の水との両面において、天にあるものと地にあるものが主の日に地上にはっきりと表れて、この世に裁きと救いが同時に現れました。

キリストの日には、天に置かれた御子（の栄光）が現れ、天に蓄えられた救い・裁き・栄光が地に下ります（「神の御使いたちが人の子の上を上り下りする」（ヨハネ 1:51））。天にあるものと地にあるものがキリストにあって合わされ、創造の二重構造が完成へと統合されます。キリストの日とは天的完成形が地に現れるときです。

ノアの日も、キリストの日も、救いと裁きが同じ出来事の両側面として現れます。このことは来臨の日のみでなく、初臨においてもその通りです。それが、ヨハネ1章の「御言葉は肉となった」ことであり、初めに言葉があった、その方・神の言葉が世に来られ、天にある御言葉が、地において「成就として現れた」光景です。天的な神のご計画が地上で可視化されたという意味です。

そして、また、天地創造の初め、神の霊が水の上を躍動していた原初の光景を思い起こすとき、天の水が地に届く働きもまた、神の霊（あるいは御使い）によって運ばれるものであることを黙想します。（以下参照。創世記 1:2、28:12、ダニエル書 10: 12-13、マタイ 3:16 他、ヨハネ 1:51、黙示録 8:3-5、使徒 2 章、⇄ルカ 10:18）

V. 第二日目の創造の目的

そのように黙想すると、第二日目は主が創造のご目的において、しようとしておられることの、全容を形作る日でした。そしてこのことは、万物は御子のために、御子によって造られたことを示す根拠となるみことばです。

第二日目には、まだ、地は現れていません。植物も動物もありません。太陽も月もなく人も創造されていません。しかし、全てが存在するための枠組みが整えられる日でした。第二日目で整えられるものとは、天と地の区別です。上の領域と下の領域を隔てられ、神の業が現れるための空間（大空（רָקִיעַ ラキア））が張り延ばされました。祝福が流れる方向性が形作られ、成就が地に届くための土台が備えられ、創造全体の働きが進むための枠組みが整えられました。神の業・働きが地に現れるための場が整えられたことは、万物が御子によって御子のために造られことを証します。御子が統治し御子がすべてを満たすための舞台です。上の水と下の水の区別は、御子にあって保たれており、御子において成就されるための前提構造です（エペソ 1:10）。

そして、このことの霊的な意味は、そのままキリストと教会との関係 —— すなわち第六日目の人の創造と結婚の奥義 —— を示唆します。

その意味で、第二日目は、「何かを創り出す日」というより、「すべての働きが可能になるための構造（枠組み）を整える日」で整えられたものは、すべてキリストの現れのために存在します。「主がしようとしておられること全容を形作る日」でした。この日は、「目的の完成」に至るものではないため、第二日目にだけ「良し」とは言われません。

さて、逆読みになりますが、ここから第一日を考察します。

（※補足1）

天地万物は神によって造られたと語られています。被造物の区別については、詩篇 148 篇 4-5 は「天の天と天の上にある水よ、主を賛美せよ。彼らは主の命令によって造られた」と語り、天の上の水も神によって造られたことが示されています。

「天の天」という表現は、単なる物質的な空間を超えて、神の御住まいを象徴する霊的な意味を持ちます。神の御住まいそのものを「被造物」と呼ぶことはありません。したがって「天の天」と言うとき、それは神の臨在の領域、神の支配の座を指す象徴的な言い方であり、物質的な天体や空間の被造物とは区別されます。一方で、空としての空間領域は当然被造物です。

「水」も「天の上の水」も、創世記においても宇宙の中に置かれた被造物として理解できます。古代の理解では、天の上に水の層があると考えられているとしたら、雲や雨として読むことも自然です。詩篇は「彼らは主の命令によって造られた」と明言し、物質的な意味では空も水も神によって造られたことは疑いようがありません。

しかし、創世記の 2 節では創造の宣言がなされていません。なぜ水は初めから存在しているのかについて思いをはせる必要があります。光は「光あれ」で生じ、天は「大空があれ」で造られたのに、水だけは創造の言葉の前からそこにあります。初めからある存在であれば、象徴的には神の本質に属することを示す描写と読むことができます。

創世記 1:2 では、水は形を持たず、区別されない状態で初めからあるように描かれ、神の霊がその上を動いていました。神の命を与える働き、御言葉の創造の御力が世界の初めから満ちていたことを象徴的に示していると理解できます。水は、いのちを与え、形をつくり、神の働きの媒体となるものです。物質的には被造物ですが、象徴的・霊的には、御言葉の働きを映す「初めからあるもの」として描かれていると考えます。

（※補足2） 従わなかった霊と降られたキリスト——創世の構造に見る主の日の黙示

天に蓄えられた御言葉、天的領域に置かれたみ言葉とは、天上のどこかに保管されたみことばというような抽象的なものではありません。主イエスが「父から聞いた言葉を語る」（ヨハネ 12:49）と証しされたように、それは父のうちにある御心そのものです。主が語られた言葉は、すべて父から聞いた言葉であり、その言葉は「初めに言葉があった」

（ヨハネ 1:1）と記されるように、創造の初めから神とともにあった御意志の領域に属します。そして、この御父の御旨は、はじめから神のことば（聖書）の内に啓示されており、主御自身が父から聞いた言葉を語られる時、聖書に示されていない概念をもって語られることはありません。「わたしが語ったその言葉が、あなたを裁く」（ヨハネ 12:48）と告げられるように、主が地上で語られた言葉は、天にある御言葉が「父から聞いた言葉」として地に届いたものです。また、「天にあるものも地にあるものも、キリストにあって一つに集められる」（エペソ 1:10）と語られるように、歴史の終局において成し遂げる御心を示す聖書の御言葉も、同じく天に蓄えられた御言葉の現れです。こうして、地で語られた

御言葉と天にある御言葉とが主の日に現れるとき、それは救いであり、また同時に裁きでもあります。

ノアの日、天の窓が開き、深淵の源が裂けたとき、上に蓄えられていた水と、下に隠されていた水が同時に動きました。これは、創世の第二日目に隔てられた領域が、主の時にしたがってそのまま地に及ぶという出来事でした。天にあるものと地にあるものが、主の御手のうちで一つの出来事として現れ、救いと裁きが同じ出来事の両側面として示されたのです。ピリピ2章が語る「天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもの」が御名の前にひざをかがめるといふみことばも、この流れの中で理解することができます。地の下にある者とは、深淵に置かれた者、死者の領域にある者です。しかし、主の日には、天に蓄えられた御言葉と、地の下に隠されていた御言葉がともに開かれ、深淵の領域にまで光が差し込みます。そのとき、深淵にある者もまた、御言葉の真理と栄光の前にひれ伏すのです。ノアの日起こったことは、主の初臨にも再臨にも通じる出来事の写しでした。天に蓄えられた御言葉が、救いと裁きとして地のすべての領域に及ぶという主の御業の深いしるしでした。それゆえに、天にあるものも、地にあるものも、そして地の下にあるものも、御名の前にひざをかがめるのです。

ここで語られる「ノアの日に従わなかった霊」（Iペテロ3:19-20）とは、神話的な墮落天使の物語ではありません。聖書が「霊」という言葉を用いるとき、そこには霊的性質と、その背後にある霊的活動の両面が含まれます。高ぶりや不従順といった霊的性状は、霊的現実の地上への現れです。その背後には、中間領域での霊的格闘が存在します。その現象を神話として読むのではなく、聖書が示す霊的現実として受け止めるべきものです。ノアの日神の言葉を拒んだ霊（霊的性質）は、主イエスの初臨において御言葉を拒んだ者たちの中に同じ姿で現れました。その霊は時代を超えて同質であり、この霊的立ち位置にある者は、すでにノアの日裁き（その型）の中に置かれています。彼らは裁かれ、呪いの中に置かれ、死の領域——深淵に閉ざされた場所に捨て置かれたのです。

しかし、ペテロは、キリストが死の領域にまで降られた方であることを、救いの核心として語ります。私たちは、よみの中にあってキリストと死に与るバプテスマを受けましたが、キリストが地の底に来てくださらなければ、私たちは命を受けることはありませんでした。バプテスマ（その死の側面）は、キリストの死に結ばれる出来事であり、霊的には「死の領域」に置かれた者としてキリストと一体とされることです。キリストの肉の捨てられたことは、私たちの肉の捨てられた運命と一体であり、古い人の死はキリストの死のうちに成就しました。

だからこそ、ペテロは「これはバプテスマの型であり、今あなたがたを救う」（3:21）と言うのです。

ノアの日水は裁きでありながら、箱舟にある者にとっては救いでした。同じように、キリストの死は裁きでありながら、キリストに結ばれた者にとっては救いです。上の水と下

の水が同時に動いたノアの日¹の出来事は、主の日に、地の下に隠されていた御言葉が開かれる出来事²の象徴でした。

ペテロは続けて、「生きている者と死んだ者を裁く方に申し開きをする」（4:5）と言います。

ここでペテロは、主の日の普遍性を語っています。天にあるものも、地にあるものも、地の下にあるものも、すべて御名の前にひれ伏すというピリピ2章の言葉と同じ流れです。地の下にある者とは、深淵に置かれた者、死者の領域にある者です。しかし、主の日には、父から聞いた御言葉が深淵にまで届き、隠された領域にまで光が差し込みます。そのとき、深淵にある者もまた、御言葉の真理と栄光の前にひれ伏すのです。

そしてペテロは、驚くべき言葉を語ります。

「このために、死んだ者にも福音が宣べ伝えられた」（4:6）

これは、「死んだ者にも＝死んだ者でさえも」という強調です。

死の領域に置かれた者でさえ、キリストの死と深淵に降られた働きの外にはいない。

キリストは、父から聞いた御言葉そのものとして、不従順の霊が閉じ込められている領域にまで下られました。

神の憐れみにすべてを閉じ込めるためです。

よみのもの —— 光の届かない闇の中で、キリストを拒絶する霊性のまま不従順の領域にとどめられている者、すなわち「肉にあるイスラエル」——は、主の日以外には救われません。よみは本来、終わりの裁きの場として理解されており、ラザロと金持ちのたとえでも、教会の中ではよみは地獄と同一視されるように語られています。福音の宣教において、この理解は大きく間違っているわけではありません。

しかし、神のみこころを黙想すると、よみは単に閉ざされた裁きの場ではなく、主の日の御言葉が隠されている領域でもあります。そこには裁きがあります。しかし、主の日にはなお憐れみの余地が残されています。地の底に蓄えられた水が主の日に開かれるように、よみもまた、主の時にしたがって開かれる領域なのです。

とはいえ、これは不信者への福音として語るべき宣教テーマではありません。

主がその続きを黙されたことは、福音は「今」という時に応答することを求めているからです。地の下に置かれた御言葉が開かれるのは主の日です。よみに下る主の顕れなしに、その憐れみは届きません。よみにまで及ぶ御言葉の働きは、主の日における神の御心の広さと深さを黙想するなら、これは、復活の奥義の側面（神の民と教会の一体）として理解されるものなのです。

こうして、ノアの日¹に隔てられた上の水と下の水は、主の日においてキリストにあって一つに集められます。

天に蓄えられた御言葉が、救いと裁きとして地のすべての領域に及ぶとき、天にあるものも、地にあるものも、地の下にあるものも、御名の前にひざをかがめるのです。

御国の完成に関する黙想

— 創世の第1日目 「光があれ」すると光があった—

創世記1章1節～5節

初めに、神が天と地を創造した。

地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上にあり、神の霊が水の上を動いていた。

神は仰せられた。「光があれ。」すると光があった。

神は光を見て良しとされた。神は光とやみとを区別された。

神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた。夕があり、朝があった。第一日。

VI. 第一日目の光とは

神の創造は、「光があれ」と言われ光ができました。ヨハネ伝でも、創世記をイメージしながらはっきりと御子を光の象徴として描いています。太陽・月・星が形造られるのは第四日目ですから、この光は、「昼と夜(光と闇)を区別する」働きを持ちます。しかし、光源は示されていません。物理的な光よりも原初的な「神の光」を示しています。この描写は御子の光を示します。では、聖書は御子の初めをどのように証ししているかを丁寧に読み取らなければなりません。

御子は「光」として世に現れました。(ヨハネ1) 新約では、御子は一貫して「光」として語られます。

「まことの光が世に来た」(ヨハネ1:9)、

「私は世の光である」(ヨハネ8:12)、

「光が闇の中に輝いている」(ヨハネ1:5)、

「光が来たことが裁きである」(ヨハネ3:19)。

これらは、創世記1章の光の働きと一致しています。創世記の光の働きは、混沌に秩序をもたらし、昼と夜を区別し、すべての創造の出発点となっていました。御子の働きもまた、闇に光をもたらす存在として、真理と偽りを区別し、救いと裁きをもたらします。

第一日目の光は御子を明らかに象徴しており、第二日目は天と地の構造を整えました。御子が現れるための舞台です。

では、御子は被造物なのか、この問いに対して真剣に答えなくてはなりません。御子は「創造された側」なのか、「創造する側」なのか。聖書は一貫して御子について、創造する側を示します。

「すべては御子によってできた」(ヨハネ1:3)、

「御子によって、御子のために造られた」(コロサイ1:16)、

「御子は万物より先に存在する」(コロサイ1:17)とのみ言葉から、創造された側に置くことはできません。御子は創造の主体であり、創造の対象ではありません。しかし光の働きは、御子の働きと完全に一致しています。

詩篇には、「あなたはわたしの子、今日わたしがあなたを生んだ」(詩篇2:7)とあります。これは、王としての任命(即位式)の言語(創造ではなく「即位」)です。詩篇の、「すべてをその足の下に置かれた」(詩篇8:6)これは、支配権の委譲(創造された存在ではない)です。ヘブル1章では、「あなたはわたしの子、今日わたしがあなたを生んだ」(ヘブル1:5)との詩篇2篇の引

用があります。そして、6節で「神は御子を世界に送った（導き入れた）とき」との表現があります。これらは御子が被造物であることを示すのではなく、御子が「創造の初めに王として定められた」という意味です。ヘブル1章3節は「御子は神の栄光の輝きであり、神の本質の完全な現れ」と語ります。

Ⅶ. 御子の即位 —— 万物の存在の根源と目的

被造物と御子との関係を黙想すると、これらのみ言葉が証しする通り、創造の第一日目を描く「光」とは、御子の「王としての現れ」の象徴を示し、「光があれ」とは、神が、御子を王として定められた（任命された）ことを宣言していると受け止められます。

第一日目の光は太陽の光ではないまことの光です。「まことの光が世に来た」、「私は世の光である」、「光が来たことが裁きである」、「すべては御子によって造られた」。

これらの言葉を並べると、創世記の光は御子の「王としての現れ」として読むことができます。「光が、やみの中から輝き出よ」と言われた神は、私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせてくださった（Ⅱコリント4:6）と語るこのパウロの言葉は、1日目の光がキリストにおける神の栄光の啓示そのものであることを示しています。第一日目の光は、御子の栄光の原初的顕現として読むことができます。

詩篇やヘブル書から読み解くと、王（メシア）としての神による即位です。

第一日目は、万物に対する、御子の「創造主・王としての任命（定め）」を象徴するものとして受け止められます。御子は、王として立てられた方、万物を治める方、万物の創造の主体であり、万物の相続者です。

そして、第二日目に世界の創造の初めにある水が上の水と下の水とに分けられました。これは、御子にある預言の約束のようなものです。

地に現れた神のかたちと御子の内に天に蓄えられている約束です。そして、主の日にそれは地に形となって顕現し、救い又は裁きとなり、栄光として現れます。こうして、創造の第二日目に区別された「天にあるもの」と「地にあるもの」は、歴史の中で御子によって保たれ、ついには主の日にキリストにあって一つに集められます。キリストにある御国の完成について、創世記を黙想するとき、第一日目に続き、第二日目もまた、創造の構造そのものとして、初めからキリストの栄光の現れへと向かっていたことが、ここに明らかになります。

御国の完成に関する黙想

—創世の第3日目 地と海—

創世記1章9節～13節

- 1:9 神は仰せられた。「天の下の水が一所に集まれ。かわいた所が現れよ。」そのようになった。
- 1:10 神はかわいた所を地と名づけ、水の集まった所を海と名づけられた。神はそれを見て良しとされた。
- 1:11 神は仰せられた。「地が植物、すなわち種を生じる草やその中に種がある実を結ぶ果樹を、種類にしたがって、地の上に芽ばえさせよ。」そのようになった。
- 1:12 地は植物、すなわち種を生じる草を、種類にしたがって、またその中に種がある実を結ぶ木を、種類にしたがって生じさせた。神はそれを見て良しとされた。
- 1:13 夕があり、朝があった。第三日。

第三日目の創造は、第二日目で上下に分けられた水が、地上で新しい姿を取る日として黙想します。地にある水の動きの中に、神の意志がどのように地に現れていくのかを示す象徴として読み取ることができます。第二日目には、神の言葉は天に蓄えられたものと、地に現れるものとして区別されました。この段階ではまだ命の現れない舞台であり、いのちが住むための場は整っていません。第三日目は、この「命のない舞台」が整えられ、神の言葉が形をもって地に現れるための場が備えられていく日です。

第三日目に水が一つ所に集められるという出来事は、神の御意志が一つの方向へと集中していく象徴として読むことができます。創世記の初めから、水は神の御言葉の働きを宿すものとして描かれ、形を持たず、区別されず、しかし神の御計画のすべてを孕むものとして存在していました。その水が「一つ所に集められる」。これは、神が万物をその主権のもとに形づくり、命へと導き、ヤーウェ——命を生かす主——の御名の栄光が現れるために、神の御意志がキリストに向けて集約されていく象徴として黙想することができます。

詩篇104篇は、創世記の水と地の区別を、賛美の言葉で言い表しています。神が水に境界を定め、地が姿を現すようにされたことが語られ、第三日目の「場の設定」と同じ秩序が示されています。水が退き、地が現れるという流れは、神の主権の働きとして理解されます。

神は「天の下の水が一つ所に集まれ」と命じられました。「集める」と訳される言葉には、目的のために整えられ、備えられるという意味が含まれます。水が一つ所に集められるという描写には、神の働きが地に形を取るために必要な準備が進められていく様子が示されています。神の御意志が、いのちのための場を整えるために向けられていく動きとして覚えることができます。

神の御計画の中心には、キリストの十字架の贖いの業があります。神の御意志は、御子において成し遂げられる命の働きのために集中し、キリストはその御計画を受け取られます。創世記の段階では世界は「良し」とされ、海が象徴するところの罪や死の影はまだ現れていません。しかし、神の御意志がキリストに向けて集中していくという視点から読むなら、水が一つ所に集められたという出来事の背後に、神が万物を命へと導くために、御名の栄光のために働いておられる流れを見ることとなります。

また、「かわいた所が現れよ」という言葉は、神の働きが目に見える形として地に姿を現すこととして覚えます。「ことばは肉となった」（ヨハネ 1:14）という出来事の原型として黙想することができます。天に蓄えられていた神の意志が、地において出来事として現れるという受肉の奥義、また、いのちを生かす体の復活についてのみこころの成就が、第三日目の地の出現に重ねられます。神の言葉が、天において蓄えられ、地において形を取り始める。その象徴として第三日目を覚えます。

地が現れたとき、命が住むための場が整えられます。水が退き、地が姿を現すという順序は、命が芽生えるためにはまずその命が働くための場が備えられなければならないという創造の摂理を示しています。神の命令によって水が集められ海となり、その結果として、命があらわれ、実を結ぶための地が初めて現れ出ます。

この流れを新約の光のもとで黙想するなら、キリストの贖いの業を思い起こすことができます。キリストが来られたとき、神の意志は御計画の成就として、世の全ての罪を引き受ける御子に向けられました。ヘブル書はこのことを、「あなたは、わたしのためにからだを備えてくださいました」（ヘブル 10:5）と証ししています。御子が受肉されたとき、その体は贖いのために備えられ、罪と死の裁きを受けるために明け渡されました。神の御計画は、み言葉の成就として、命を生かす働きのために、キリストにある死と罪の贖いに集中していたのです。

その御業が果たされることによって、私たちが生きるための新しい命の場——「地」が現れます。実りをもたらす現れ出る地は、キリストの体を象徴するものとして読むことができます。創世記の「地」は、神の言葉が形を取り、実を結ぶ場所です。新約では、地はこの世界であるとともに、キリストの体（教会）は、神の働きが形を取り、実を結ぶ場所です。第三日目に地が現れ、そこに実りが生まれる出来事は、キリストの受肉・贖い・復活、そして教会の誕生を思い起こさせる型として読むことができます。

命の種、実りは命の継承と繁栄であり、御国の宣教を描きます。第三日目に地が現れ、そこに実りが生まれるように、キリストの贖いの業によって、私たちが命を得て生きるための場が整えられます。海が集められた後に現れる地は、人の住む良い地としての祝福の場であり、神の働きが実を結ぶ場所です。地が実を結ぶという事実は、命が芽生え、成長し、実りをもたらす神の働きを示し、復活の命や神の民が実を結ぶ姿を思い起こさせます。

第三日目の自然界の秩序は、終末の復活において命がそれぞれの栄光を帯びて現れるという出来事と対応しています。創造の実りの多様さは、終末の復活における栄光の多様さと関係しています。創造の出来事において神の言葉が形を取り実を結ぶように、終末においても神の言葉は、キリストにある命の完成として現れます。

このように、第三日目は、水が水として描かれながらも、天に蓄えられた神の言葉が地において形を取り、受肉・贖い・復活・教会の創造というキリストの働きの全体が示される日です。水が集められて海となり、地が現れ、実を結ぶという流れの中に、神の意志が地において形となり、命を生み出し、実を結ぶという創造の摂理を黙想することができます。神の言葉が実りとして顕れる働きを御国の現れとして捉えるなら、神の言葉が形となった姿は、その命の芽生えという命の福音が、教会を通してこの世界に現れることと受け止められます。

【補足】 「種類に従って」について

創世記が用いる「種類に従って」という表現は、自然界の秩序が整えられ、命がその本質に従って実を結ぶようにされたことを示す言葉です。この秩序は、新約で語られる「種とからだ」（1コリント15章）の出来事と関係しており、終末の復活において命がそれぞれの栄光を帯びて現れるという現実と対応しています。

【補足】 水が一つ所に集まって海となり、地が現れる

本文の理解を補うため補足をします。

第三日目の「水」と「地」の描写には、神の御言葉がどのように働き、どこへ向かい、何を生み出すのかという聖書全体に通じる重要な示唆が含まれているように思われます。創世記の初めに置かれた水は、形を持たず、区別されず、しかし神の意志と働きの可能性をすべて内包したものと描かれています。その水が「一つ所に集められる」と語られるとき、神の御言葉が目的をもって集中し、救いと裁きに関する神の意志が特定の方向へ向けられていく様子が示されていると受け取ることができます。

聖書全体の証しを覚えるとき、神の預言・み言葉が最終的に向かう先は御子キリストであり、救いの約束も、罪に対する裁きも、すべて御子において実現します。そのため、水が集められて「海」と呼ばれる場面は、神の御言葉が御子に集約され、御言葉による裁きが現れる出来事として黙想できます。海は聖書において、深淵・混沌・死・裁きの領域として語られるため、神の御言葉が集まった結果として海が現れることは、贖いの場面を思わせます。その後、「水が退き、地が現れる」という順序は、裁きが取り除かれ、命が働くための場が開かれるという救いの展開と重ねられます。御子が神の御言葉に含まれる裁きを引き受けられたとき、裁きは退き、命が現れ、神の御言葉が実を結ぶための新しい場が整えられます。

創世記の地は、神の御言葉が形を取り、実を結ぶ場所として描かれています。新約においては、キリストの体である教会が同じ役割を担います。第三日目に地が実を結ぶという描写は、神の御言葉が贖いの後に実を結ぶという展開と重なり、受肉・十字架・復活・教会の誕生へと続く救いの道筋を思い起こさせます。このように、第三日目の水と地の出来事は、神の御言葉が御子に向けられ集まり、裁きが御子において引き受けられ、その後命の働きが開始されるという福音の命の祝福の流れを象徴的に示していると理解できます。

御国の完成に関する黙想

—創世の第4日目時のしるし太陽、月、星—

創世記1章14節～19節

1:14 神は仰せられた。「光る物が天の大空にあって、昼と夜とを区別せよ。しるしのため、季節のため、日のため、年のためにあれ。

1:15 また天の大空で光る物となり、地上を照らせ。」そのようになった。

1:16 神は二つの大きな光る物を造られた。大きいほうの光る物には昼をつかさどらせ、小さいほうの光る物には夜をつかさどらせた。また星を造られた。

1:17 神はそれらを天の大空に置き、地上を照らさせ、

1:18 また昼と夜とをつかさどり、光とやみとを区別するようにされた。神はそれを見て良しとされた。

1:19 夕があり、朝があった。第四日。

1. 創造の目的と黙想の基点

創造のご目的の中心には、最後のアダム（キリスト）と花嫁（教会）の結合によって現れる『一体の人』があります。創世記の最初のアダムは、最後のアダムの型であり、人類と世界に対する神のご計画とご目的を映す「最初のもの」です。創世記1章はアダムの創造とそれまでの天と地の準備であり、万物の創造は、初めから、最後のアダムの完成に至ることを見据えています。

黙想の着地点は、常に一体の人の創造です。神のご計画を知るために、『最初のもの』に込められた意図を深く味わい、それらが指し示す霊的な本質と神のご目的について黙想します。そして、創造の最初のものに現れている、この世界の構造と秩序を受け止めようとすることは、神の目的を知るための最も確かな道のひとつです。だからこそ、見えるものの中から、見えない事柄に対して黙想し、霊的な理解を求めたいのです。

2. 第三日目の栄光と第四日目への接続

さて、パウロは「神はみこころのままに、それぞれの種にそれぞれのからだをお与えになります」（1コリント15:38）と言いました。先の第三日目に関して、種はその種にふさわしい形（からだ）を与えられ、そこに固有の栄光が現れることについて、創造の实りにも多様な栄光が備えられていることを見してきました。その際、太陽、月、星がそれぞれ異なる栄光を持つように（1コリント15:41）と語られています。異なる栄光の中に、光であるキリストを指し示す多様な栄光を見ることができます。それぞれが、神の時のしるしとしての目的と働きを担い、輝く存在として置かれていることを黙想することができます。

3. 第四日目：時と秩序の創造

第四日目の光るものの配置は、この世界の完成に至るまでの祝福の場における宣教の秩序と導きを思い起こさせます。また、時のしるしは主の日を待つ秩序でもあります。第四日目は「地上世界の秩序と支配の枠組み」が創造される日として黙想します。

太陽・月・星が「しるし」として置かれ、時・季節・方向を示しました。太陽・月・星は、人間にとって揺れ動くことのない不変の座標の象徴でもあり、宣教の導きや秩序、霊的方向性を示す象徴として理解することもできます。そして光はキリストご自身の象徴であり、その「時のしるし」は、キリストの光を反映しつつ、教会あるいは世界を導く構造を持っていると考えられます。

創世記1章14～18節の働きは、昼と夜を区別すること、季節・時・年を示すこと、地を照らすこと、昼と夜を治めることです。これは地上の生活・社会・農耕・文化・時間・秩序の基盤そのものです。

4. 時のしるしと主の日を見据える秩序

ここには、地上の御国の秩序が見られ、人間が地を治めるための『統治の枠組み』が創造されています。治めるためには時間・季節・昼夜・農耕・暦・方向性が必要です。

第四日目は、太陽・月・星が「しるし」「季節」「日」「年」を支配するために置かれました。「時を刻むため」ではなく「時を示すため」に置かれたことは、「時の意味」そのものが創造された日として理解することができます。神の歴史の流れを読み取るための「霊的な秩序」の創造であるなら、第四日目を地上の歴史が主の日へ向かうための秩序が整えられた日として読むことができます。

聖書全体では、「時のしるし」は常に主の日を見据えるためのものとして語られます。たとえば次のように示されています。

「天のしるしを恐れるな」（エレミヤ10:2）

「しるしと季節のために」（創世記1:14）

「時を見分けることができないのか」（マタイ16:3）

「しるしと不思議が天に現れる」（ルカ21:11）

「太陽は暗くなり、月は血のようになる」（ヨエル2:31）

その意味では、終末を待つ教会の霊的生活と深く結びつきます。第四日目に置かれた太陽・月・星は、主の日へ向かう歴史の秩序を示す「時のしるし」であり、地上の歩みを導く光として与えられました。しかし、これらの光は本体ではなく、天の現実を地に伝えるために置かれた「司る光」です。では、この「しるし」はどのような構造の上に置かれているのでしょうか。しるしの本質を理解することなしに、太陽・月・星を地上的権威の象徴として読むことはできません。そこで次に、第四日目の象徴理解を支えるため、「しるしの本質」を確認します。

5. 太陽の象徴：地上的権威の本質

第四日目の光るものを「地上的秩序の象徴」として読むためには、まず「しるしとは何か」を押さえる必要があります。太陽・月・星は、地上の歴史における権威や秩序を象徴しますが、それらは本体ではなく、天の現実を地に映すために置かれた「しるし」です。このことを踏まえた上で、太陽の象徴を見ていきます。

太陽の象徴を御子そのものとして読む必要は必ずしもありません。むしろ、第四日目は「主の日を待つための時の秩序」として読むべきものと思います。

では、太陽とは何でしょうか。太陽は、地上の秩序を方向づける中心的な権威を象徴するものとして読むことが自然です。歴史の中で、それは神殿、律法、王権、教会制度、教理体系、典礼などとして現れますが、いずれも「しるし」であって本体ではありません。地上の秩序を示し、信仰共同体を導きますが、救い主そのものではありません。

太陽とは、人が「これがなければ信仰は成り立たない」と感じる中心的な権威・枠組みです。それは必ずしも悪ではなく、創世記では「良かった」と言われているように、秩序を与えるために必要なものです。太陽は「信仰の時間と方向を決めるもの」として機能します。教会暦、典礼、礼拝形式、教派伝統、教理体系、聖書の読み方の枠組み。これらは信仰の時間と方向を決定付け、信仰共同体が「絶対視しやすい」ものです。しかし、主の晩餐が「主の来られる時まで」と示されたように、共同体のなくてはならない中心的な制度もまた、完成の時までのものです。

太陽の栄光は、地上的中心（神殿・律法・王権）として理解できます。これは御子の光を反射するものとしての「しるし」であり、御子の現れの時を待つために存在しています。月の栄光は、補助的権威（祭司・預言者・伝統・共同体の秩序）を表します。星の栄光は、無数の小さな秩序（民・部族・共同体・証人たち）を表します。

これらはすべて地上的秩序の中に輝く栄光であり、御子の光を受けて輝く存在です。それゆえ、「上の水＝天的形態」「下の水＝地的形態」という区別の上に、第四日目の「地上的秩序の栄光」が配置される順序が、神の創造の秩序にかなっています。

そして、第四日目に太陽・月・星が置かれたのは、御子の光を地上の歴史の中で可視化するためです。別の言葉でいえば、御子の光を地上の歴史の中で「時・季節・秩序」として翻訳するためのしるしと言えます。

6. しるしの本質：第四日目の象徴を支える神学的基礎

第四日目の太陽・月・星を「地上の秩序の象徴」として読むための、「しるし」についての理解を深める必要があります。第四日目の光るものは、地上の歴史を導く光として置かれてきましたが、それらは本体そのものではなく、天の現実を地に映すものとしての光です。この「担う光」という性質は、創造第二日目に示された天と地の関係（上の水と下の水の区別）と深く結びついています。

第二日目：天と地の間に置かれた「隔て」の意味

第二日目に、神は上の水と下の水を分け、大空を隔てとして置かれました。この出来事は、宇宙の物理構造の説明だけではなく、天の現実と地の現実の間に存在する「時差」と「距離」を象徴しています。上の水＝天の領域（神の現実・本体）、下の水＝地の領域（影・しるし）、大空＝天の現実が地に届くまでの「境界」。天で定められたことは、地ではすぐには見えません。しかし、見えないからといって存在しないのではなく、天ではすでに真実であり、地ではその現れを待つだけです。この構造が、「しるし」の本質を形づくりします。

アブラハムの信仰：しるしの本質を最もよく表す物語

神がアブラハムに天を見上げさせました。

「星を数えることができるなら、数えなさい」（創世記 15:5）

神が語りかけ、アブラハムが見上げたのは星の数の多さに感動させたかったのではありませんでした。アブラハムが見た星は、天においてすでに定められた神の約束の「しるし」でした。地上にはまだ何も見えませんでした。子も、民も、国も、何一つ存在していませんでした。しかし、天ではすでに神の御言葉が確かに定められていたのです。

アブラハムの信仰とは、地上では見えないが、天ではすでに真実であるものを受け取る信仰でした。イサクもヤコブも同じ信仰に生まれました。彼らが受け取った約束は、地上では影であり、その成就是天においてすでに確定していました。

ヤコブが見た「天に届くはしご」も、天の現実が地に触れているが、まだ完全には見えていない状態を示しています。天の真実について、地でその現れを待つ信仰者のビジョンが横たわっています。復活の信仰も同じ構造に立つ復活もまた、天ではすでに真実であり、地では時を待つものです。地上では死が支配しているように見えても、天ではすでに新しい命が確立されており、その現れを待つだけです。

第二日目の構造は、天の現実が時を経て地に現れる、その「神の働きの流れ」を示しているのです。第二日目の構造を踏まえると、第四日目の太陽・月・星の本質が鮮明になります。それらは天の現実の本体ではないが、天の現実を地に映す「しるし」であり、主の日へ向かう秩序を地上に可視化するために置かれたものである、と。

アブラハムが天を見上げて神の御言葉を受け取ったように、第四日目の光るものもまた、天の現実を地に示すために輝く光です。太陽・月・星は、主の日を待つための秩序を形づくる「時のしるし」であり、地上の歴史を導くための光として置かれました。しるしは本体ではありません。しかし、しるしがなければ、私たちは天の現実がどこに向かっているのかを読み取ることができません。

第四日目の光は、完成の光を待つための光です。天にある本体の光が地に届くその日、しるしは役割を終えます。しかしその日まで、しるしは天の現実を地に映し、主の日へ向かう秩序を示し続けます。このような理解のもとで、第四日目の光るものとは、天の現実を地に映す「しるし」であり、主の日へ向かうための秩序を形づくる光です。しかし、しるしは本体ではなく、時が満ちるとき、その役割を終えます。

では、歴史の中でこの「しるし」がどのように揺さぶられ、どのように役割を終えていくのか。その最初の大きな出来事が、ユダヤにおける神殿崩壊でした。次に、第四日目の太陽の象徴が歴史の中でどのように成就したのかを、神殿崩壊という具体的な出来事を通して見ていきます。

7. ユダヤ神殿崩壊：太陽の象徴の歴史的成就

パウロが言うように（1コリント 15:41）、太陽の栄光、月の栄光、星の栄光はそれぞれ異なります。地上的秩序の中心にはそれぞれの役割と栄光があります。しかし、その「栄光」は永遠ではありません。天の万象がその日に崩れ落ちることを意識した終わりの日に向かう聖徒の歩みが求められています。

第四日目の時のしるしが置かれ、必要な秩序として定められます。しかし、その配置は永遠ではなく、主の日にはすべての「しるし」が役割を終えます。黙示録 21:22~23 には「都には神殿

がなかった。主なる神と小羊がその神殿だからである。都は太陽も月も必要としない。神の栄光が都を照らし、小羊がそのともしびだからである。」（黙示録 21:22-23）とあります。

ユダヤにおいては太陽は神殿と律法とに象徴されます。だから、その「崩壊の時」について主御自身が「時のしるし」についてこの教えをされました。ユダヤ人にとって神殿は信仰の中心、時の中心（祭り・暦）、世界の中心（宇宙の軸）、神の臨在の中心、共同体の秩序の中心でした。地上的秩序の「太陽」として機能していました。「太陽には栄光がある」ということばはイスラエルでは神殿の栄光と重なります。

太陽の役割は、時を刻むこと、暦を定めること、祭りの時期を決めること、年の区切りを与えること、昼夜を分けること、生活と信仰の中心を照らすことという、神殿と律法としてそれらの「秩序」を与え、役割を果たします。太陽の栄光は神殿の栄光であり、太陽の中心性は律法の中心性を示します。だからこそ主は「その日」を語る時、神殿崩壊を語られました。

主イエスはマタイ 24 章で

「この神殿は崩れる」（マタイ 24:2）、

「石が一つも積まれたまま残らない」（マタイ 24:2）、

「太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は天から落ちる」（マタイ 24:29）

と示されました。これは第四日目に置かれた「時のしるし」が揺さぶられるという終末構造の歴史的なユダヤにおける実現です。

紀元 70 年の神殿崩壊は、象徴的な型ではなく、ユダヤ世界そのものに対する実際の裁きであり、旧約的秩序の終焉を示す歴史的現実です。同時に、それは来るべき全世界の裁きの予兆として置かれたしるしでもあります。

実際に主が十字架にかかられたとき、真昼の太陽は暗くなり（ルカ 23:44-45）、神殿の幕は裂け（マタイ 27:51）、その神殿（主の肉）は壊されました。三日目によみがえりの体において主の神殿が立てられ、新しい秩序が始まりました。

主はユダヤの神殿崩壊のときに関して、この時のしるしについて教えをされました。神殿崩壊は地上的秩序（太陽）が揺さぶられる最初の大きな出来事であり、終末の揺さぶりの原型です。太陽は暗くなる（マタイ 24:29）、月は血のようになる（ヨエル 2:31）、星は天から落ちる（黙示録 6:13）。第四日目に「時のしるし」として置かれたものが主の日には「しるしとして揺さぶられる」ことが明らかとされています。

終末を待つ教会の霊的使命には、時を読むことがあります。

「目を覚ましていなさい」（マルコ 13:33）

「時をわきまえなさい」（ローマ 13:11）

「主の日は盗人のように来る」（1 テサロニケ 5:2）

「しるしを見分けなさい」（マタイ 16:3）。

それは主の日を待っているということです。主の日に備え、主の日に焦点を当てています。主の日とは（新創造の）完成の時です。ここまで見た神殿崩壊は、太陽の象徴の歴史的成就でした。次に、より普遍的な終末の揺さぶりとして「天体崩壊」を見ます。

8. 天体崩壊の象徴：終末における秩序の揺さぶり

「天の万象が崩れ落ちる」ことは、権威・秩序の崩壊を象徴する言葉です。旧約預言、ユダヤ黙示文学、主イエスの言葉、ペテロの言葉は、共通して天体の崩壊を「地上の秩序の崩壊」の象徴として使っています。

イザヤ 13 章では太陽は昇らず星は光を失うと語られ（イザヤ 13:10）、これはバビロン帝国の崩壊の象徴でした。

エゼキエル 32 章では星を暗くし、太陽を雲で覆うと語られ（エゼキエル 32:7）、これはエジプトの崩壊の象徴でした。

ヨエル 2 章では太陽は暗くなり、月は血に変わると語られ（ヨエル 2:31）、これは主の日、神の裁きの象徴でした。

第二ペテロ 3 章でペテロは、天は大きな音を立てて消え失せ、天体は焼けて崩れ落ち、地とそのわざは暴かれると言いました（2 ペテロ 3:10）。これは創造第四日目の構造そのものが揺さぶられるという象徴表現です。

黙示録 6 章でも「天が巻物のように巻かれる」という象徴表現が出てきます（黙示録 6:14）。

天体崩壊の預言は「象徴理解が本意」であることが多く、物理現象は従属的であり、中心的なメッセージではないと考えられます。だからといって物理世界の事象をことさらに否定する必要もありません。しかし、聖書が語るようにその真意をくみ取らなければ、気を付けるべき注意点や祈りの向かう先が損なわれてしまいます。

主イエスが神殿崩壊を語る時、天体崩壊の言語が使われたのも同じ理由です。太陽（神殿の栄光）、月（祭儀の秩序）、星（イスラエルの指導者たち）、これらが「落ちる」というのは、イスラエル（ユダヤ教）の世界が終わるということでした。ペテロの言葉も同じ意味合いを持っています。秩序の崩壊が語られているのです。天体崩壊の言語は「秩序の崩壊」を象徴するものであり、必ずしも物理的に星が落ちることを意味しません。しかし、十字架のとき、太陽が暗くなるという「実物的現象」が伴うことで、象徴が現実を貫いて成就することが強調されました。象徴が本意でありながら、実物的光景がその象徴を裏打ちするという構造があります。

終末では、象徴的成就に伴い、どのような形であるかはわかりませんが、より包括的な実物現象が成就する可能性が高いと理解されます。象徴にしても物理現象にしても、その結末の意味は大きく変わりません。もし物理現象であるとしたら、そのとき人類は死滅します。この世の今ある自然法則が刷新されます。天体崩壊は「生存基盤の崩壊」という最大級の象徴です。その天体のもとに生きる人にとっては致命的であり、それまでの世界で生きることはできないということです。

人類にとって宇宙の万象は基盤的な法則であり、時のしるしの中心軸です。人類の歩みを支える土台であり、方向を示す道標であり、生命の根幹でもあります。

しかし、神のはじめの創造において光の写し（栄光）として置かれた「最初のもの」は崩れ去り、やがて真の栄光が現れるというとき、旧創造の真意とされたところの新しい創造がそこにあります。それが終わりの時（完成の時）を待つ「時のしるし」の持つ意味です。

9. 地上の権威と「空中の権威」：第二日目と第四日目の霊的構造

天体が時のしるしとして置かれているにもかかわらず、地上の権威が主の御計画・神の時に對して従わず、裁きが定められるときがあります。サタンの霊的活動には、天で発せられた神の御言葉が地に届くのを妨げる働きがあり、それは創造二日目に置かれた「隔て」の領域で起こる現象として理解できます。

創造二日目に神が広げられた大空は、上の水である天の領域と、下の水である地の領域を分ける隔てであり、天の現実が地に届く際に通過する境界です。この大空は、ダニエル書 10 章が描くように、黙示的にとらえれば、天で聞かれた祈りが地に届くまでの間に霊的な抵抗が生じる場所であり、まさに「空中」と呼ばれる霊的境界領域の象徴です。

創造四日目に置かれた天体は、時を示し、秩序を保ち、地上の統治を象徴する代理の光として働く存在でした。天体が大空に置かれたという事実は、地上の統治権がこの「隔て」の領域と深く関わっていることを示しています。したがって、エペソ書 2:2 が語る「空中の権威を持つ支配者」とは、この隔ての領域で働き、神の御言葉が地に届くのを妨げ、地上の統治がキリストの時に向かうのを阻む霊的勢力の象徴です。

これは創造二日目と四日目の構造を重ね合わせることで、曖昧だった概念が一気に輪郭を持って理解される部分です。ダニエル 10 章はこの象徴を最も鮮明に描いています。天では祈りが聞かれているにもかかわらず、地ではその成就が遅れ、その間に「国の君」と呼ばれる霊的勢力が立ちほだかります。ミカエルが介入して突破が起こるという描写は、上の水である天の現実と、下の水である地の現実の間に存在する大空の領域で、空中の権威が妨害するという構造をそのまま示しています。

これは創造の秩序と霊的戦いの黙示的光景が一致した象徴的な理解です。そして、地上の統治がキリストの時に向かわないなら、天は巻かれます。代理の光である地上の統治が役割を果たさず、空中の権威が支配を強めるとき、天体という統治の象徴が揺らぎ、ついには天が巻かれるという象徴的表現が成就します。これは代理の光の時代の終わりを意味し、その後には本体の光であるキリストが現れ、すべてを照らします。

創造一日目の光から黙示録の完成に至るまで、この流れは一つの秩序として貫かれています。

10. 第四日目の統治の権威とその本質

さて、第四日目の統治の権威についてももう少し掘り下げます。創造の第四日目は「地上の統治の権威を、神がしるしとして委ねた（配置された）日」として読むことができます。

主は「統治の権威は神から委ねられたもの」と語られました。主イエスはピラトに言いました。「あなたに与えられている権威は、上から与えられたものだ。」（ヨハネ 19:11）権威は元来人間のものではありません。神が委ねたものであり、神の秩序の中でのみ正しく機能するということです。

「昼を支配する大きな光、夜を支配する小さな光」（創世記 1:16）ここで使われる「語根（*mashal*）支配する」は統治・治めるという意味です。太陽・月・星は地上の秩序を治める「権威の象徴」として置かれました。天体が初めから地上の祝福の基盤として良いものとして整えられたということは、地上の統治もまた、良い裁きが行われるために神によって定められたことを意味しま

す。この言葉の意味はペテロの「統治者たちの善を行うための裁き」（1ペテロ 2:14）の言葉に通じます。そして本来、創造の秩序の通りに良い状態であるなら、すべての統治の権威は神の時を見分けるものとしてキリストに収束しなければなりません。そして、旧創造のしるしとしての統治はやがて役割を終え、新しい創造の秩序がキリストにおいて現れます。

11. 新創造の統治の座としての十二使徒

主が十二使徒に対して「あなたがたも、わたしの国で、わたしの食卓について食事をし、また王座に着いて、イスラエルの十二の部族をさばくのです」（ルカ 22:30）と語られたとき、それは新しい世界の秩序の中心に彼らを据え、統治の座を委ねるといった宣言であったのです。

宣教と祝福、命と死、救いと裁きについて、御国の鍵が彼らに託され、「あなたがたがだれかの罪を赦すなら、その罪は赦されます。赦さずにおくなら、そのまま残ります」（ヨハネ 20:23）と語られた言葉は、天と地をつなぐ権威の委譲を示しています。異邦人への宣教と交わり的一致もまた、御国の門の鍵がペテロに預けられ、彼を通して開かれたことによって実現したのです（参照：マタイ 16:19、使徒 2 章で、ユダヤ人の開門は、聖霊降臨の後、ペテロが最初の説教を行い、約 3000 人がバプテスマを受けて教会が誕生する。使徒 8 章でサマリア人への開門、使徒 10 章で異邦人への開門、使徒 15 章での確証）。

十二使徒たちの座は、まさに天の万象の新しい秩序と基盤であり、福音は彼らによって伝えられた教えを受け継ぐ信仰によって開かれました。旧創造では天体が時と統治のしるしとして置かれていましたが、新創造では十二使徒がその役割を担います。彼らは新しい世界の秩序の中心であり、天の万象の基盤のように配置されました。

このような理解のもとで見ると、時のしるしの基盤である天空の星座が天の秩序を形づくるように、使徒たちの座が新しい創造の天的秩序を形づくる姿が見えてきます。

福音は使徒たちの教えを受け継ぐ信仰によって開かれ、彼らの座は新しい創造の天体のように輝き、御国の秩序を照らす光となるのです。

12. 歴史の中での「時のしるし」

聖書の歴史の中には、神が地上の権威を「時のしるし」として用いられた例が数多く見られます。クロス（キュロス）も、ネブカデネザルも、パロも、いずれも神の時を示すために立てられた存在でした。

パロがヨセフの時代に「夢を見せられた」ことはその典型です。異邦の王でありながら、神は彼に七年の豊作と七年の飢饉という「時のしるし」を夢として示されました（創世記 41 章）。神の民の救いのため、そして世界の救いのために、地上の王が神の時を受け取り、見分ける器として用いられたのです。

ネブカデネザルの幻と矯正も同じ意味合いです。ダニエル書では「天の神があなたに王国をお与えになった」（ダニエル 2:37）として幻が与えられ、これから起こる神の御計画が示されました。しかしダニエル 4 章では、彼は高ぶり、権威を乱用し、神の時を見分けられなくなります。そのとき神は彼を「獣のように」し、権威が神から委ねられたものであることを悟らせました。

バビロン崩壊とクロスの統治も同じです。ベルシャツアルの宴会では「メネ・メネ・テケル・

ウパルシン」と示され（ダニエル5章）、神は「時の終わり」を告げるために介入されました。そしてクロスは「わが牧者」「わが油注がれた者」と呼ばれ（イザヤ45章）、異邦の支配者でありながら神の時を実現するために立てられました。

その他にも、出エジプトのときパロに対して「わたしの力をあなたに示すため」（出エジプト記9:16）と語られ、神の時を示すために立てられたことが明らかにされています。

エステル記6章ではアハシュエロス王の眠りが奪われ、モルデカイの記録が読まれ、神の時が動き出しました。

エズラ7:27では「主は王の心に思いを起こさせ」神殿再建の「時」を動かされました。

さらに、神は実際の天体そのものを用いて時を示されることもあります。太陽が止まる（ヨシユア10章）、日影が戻る（列王記下20:11）、星がメシア誕生の時を示す（マタイ2:2）などです。

13. 時のしるしが指し示す方向性：完成へ向かう秩序

第四日目に置かれた「時のしるし」は、完成そのものを実現するためのものではなく、完成へと向かうための秩序を与えるために置かれたものでした。太陽・月・星は、地上の歴史の中で神の時を読み取り、その流れに従って歩むための光として機能します。

「時が満ちる」という言葉は、この「しるしの秩序」が指し示す方向が、やがて一つの頂点へと収束することを示しています。しかし第四日目は、その頂点そのものを語る日ではありません。頂点へ向かうための道筋が整えられた日です。

創造の秩序は、第一日目の光から始まり、第四日目の光の配置によって歴史の中に組み込まれ、そのすべてが「来るべき方」の栄光を指し示す、到来を待つためのものでした。しるしは本体ではなく、本体を待つための光です。したがって、第四日目の黙想は、「しるしが示す方向を読み取り、その先にある完成を待ち望む姿勢」へと私たちを導きます。

完成そのものは、まだ語られません。それは創造の六日目に委ねられた神の御計画であり、第四日目はその到来を待つための「時の秩序」を与えられた日です。しるしは主の日を語りますが、しるしは成就ではありません。しるしは光を映し、本体の光が現れる日を待ち望むために輝きます。第四日目の光は、完成の光を待つための光です。

注釈（補足解説）

第3章（第四日目：時と秩序の創造）」の補足

【本黙想における解釈のとり方創造の順序について】

この黙想で採用しないよく知られた解釈についても併せて考察します。福音派・保守的な創造論の中で、「太陽はすでに存在していたが、大気が不透明で見えなかった」という解釈は一般的に知られているかもしれません。

黙想の中では、現在知られている文明の理解、科学的矛盾のない順序に対して取り組むことはしません。そのため、以下の解釈とは関わりを持たない立ち位置で、黙想を展開します。

（科学的矛盾を抑えようとする解釈の例）

太陽は創世記1:1の「天と地」の時点で既に存在していたのです。しかし、地球の大気は濃厚で、火山性ガス・水蒸気・微粒子・原始の大気などにより、光が地表に届かない状態だったことが類推されます。第一日目の「光があれ」は、太陽光が大気を通して地表に届き始めたことです。第四日目は、大気が透明化し、太陽・月・星が見えるようになった日です。

これは、植物が太陽より先にある問題を科学的に説明するための一般的な理解となりえます。なぜなら、植物は光が必要であり、太陽がなければ光合成できないからです。しかし、太陽は存在しており、光は届いており、ただ太陽の形が見えなかっただけと考えれば矛盾は解消されます。さらに14節の「光体があれ (וַיִּבְרָא אֱלֹהִים אֶת-הַמַּקְוֵה) 」は「見えるように配置された」という意味にも読めます。これは、古代の大気は不透明だったという科学的仮説のモデルと一致します。

上記の解釈は「科学的矛盾をなるべく避けるための説明」であって、創造の神学的順序そのものの意味と重要さを説明する働きは担いません。なぜ植物が先で太陽が後なのか、なぜ神がこの順序を選んだのか、創造の構造がキリストに収束することを説明できないものとなっています。科学的調和説のゆえに、書かれてあることを超えて説明すると、科学の矛盾を最小限にすることを目的としてしまい、外側の説明をすることがかえって創造の内的な意味において矛盾を抱えてしまうこととなります。

象徴的理解を本意とした場合、ここでは「植物が太陽より先に造られた」ことを矛盾とは見ません。むしろ、象徴の通りでよいし、神がそうされたなら問題はないと考えます。これは信仰的強がりではなく、創造の順序そのものに神学的意味があるという前提に立つものだからです。

まず、神がそう造られたなら、それが自然の秩序の「原型」であると悟るのです。神は自然法則の上におられ、法則を創造する側です。植物が太陽より先でも、神がそうされたならそれが「本来の秩序」であり、自然法則が後から神の秩序に従うと理解します。科学的にも光はすでにあり、第一日目の光が植物を支えることは可能であると説明しても構いません。しかし、その説明は別の分野に委ねます。

創造の第一週は神の創造であり、自然法則の通常運用ではないことを前提とします。すべ

て神の創造の奇跡に支えられています。いのちの存在、生存と成長は神の直接的働き（創造バラー（אֱלֹהִים）と配置アーサー（הַשָּׁמַיִם））によるものです。

知られている科学的な説明は、矛盾を最小限にすることができても、必ずどこかで創造の奇跡にあたり、説明不能の創造にゆだねることになります。それを最小化し、知られる科学説明をこなすのは矮小化に見え、滑稽な科学に見えてしまいます。どこかで完成の状態からスタートする必要があるのです。科学は「原因→結果」で説明しますが、創造は未完成から完成へ進むのではなく、完成の状態から「秩序が展開される」形で描かれています。神の「御計画」は初めから完成しているのです。「初めから終わりを告げる」（イザヤ46:10）、「御計画は天地創造の前から」（エペソ1:4）とあるとおりです。

この黙想における創造の秩序の神学的な順序はこうでした。この世界の第一義的な事象は最初のアダム、創造の初めと呼ばれるものであり、これは最後のアダム、御国の完成を示すための神の御計画であると悟り（この世界が神の御言葉によってなったことを悟るので）、創造の一日一日に完成に連なる意味があることを読み解くのです。

創造の順序は神学的構造ですが、物理現象もまた「証（sign）」としてその構造に従っていたと考えたいのです。「見えるものは見えないものからできた」（ヘブル11:3）、「天は神の栄光を語り告げる」（詩篇19:1）からです。物理世界は御言葉の構造を「証しするために」造られたのです。

- ・第一日：御子の光（まことの光）（王の即位）
- ・第二日：天的形態と地的形態の区別（完成に至る設計図）
- ・第三日：御言葉が形となる（成就の開始）（地と実り）
- ・第四日：地上的秩序の創造（太陽・月・星）御子の統治を象徴する被造の光

御国の完成に関する黙想

—創世の第5日目 空の鳥と海の生き物—

創世記1章20節～23節

- 1:20 神は仰せられた。「水には生き物が群がれ。鳥が地の上、天の大空を飛べ。」
- 1:21 神は、海の巨獣と、種類にしたがって、水に群がりうごめくすべての生き物と、種類にしたがって、翼のあるすべての鳥を創造された。神はそれを見て良しとされた。
- 1:22 神はそれらを祝福して仰せられた。「生めよ。ふえよ。海の水に満ちよ。また鳥は地にふえよ。」
- 1:23 夕があり、朝があった。第五日。

1. 海と空に満ちる命の出現と、揺らぎの世界に置かれた祝福

第四日目までに、世界は光を受け、天と地の区別が与えられ、地が姿を現し、太陽・月・星が置かれ、時の流れが示されました。その中に、初めて「存在を与えられた命（ハヤー הַיָּרֵא）」が置かれるのが第五日目です。「わたしはある（エヒエー הֵיְהִי）」と名乗られた方が、命を存在させ、生かす御業をここで初めて世界の中に現されます。

そしてここで「祝福」という言葉が初めて登場します。「生めよ。ふえよ。」という言葉は、命が広がり、あふれ出ることを望む神の心を示しています。しかし、その祝福が向けられた場所は、安定した大地ではなく、海と空という定まらない領域でした。海は深く、底知れず、古くから混沌の象徴として語られます。空は天と地の間に広がり、境界のあいまいな領域であり、上からの働きと下からの現実が重なり合う場所です。そのような「定まらない場」——この黙想では、揺らぎの世界と呼ぶことにしますが、神はそこに最初の生き物を置かれました。

この事実は、創造の物語の中で非常に重要な意味を持ちます。その意味は、海と空に置かれた命の象徴をたどる中で、徐々に明らかになっていきます。

第五日目は、安定ではなく揺らぎの中に命が置かれ、そこで祝福が語られた日として読むことができます。第五日目に命ある存在を満たされたこの揺らぎの世界——海と空は、「一体の人が受け継ぐべき地（ハ・アレツ אֶרֶץ）（※補足1）に属さない領域」であり、まだ動物も人も創造されていないときに、先にその領域を満たすための祝福が語られたのです。

（※補足1）

創世記1章の「地（ハ・アレツ）」は、後にイスラエルが受け継ぐ「地（ハ・アレツ）」の源初の姿であり、やがて完成の人が受け継ぐ御国を象徴的に先取りする領域として読むことができます。

1-1. 海の生き物・深淵の中に置かれた命と救いの象徴

海に生きるものは、深い水の中で群れをなし、やがて聖書の中で「救われるべき者」の象徴として語られるようになります。主イエスが弟子たちに言われた言葉はよく知られています。「わたしについて来なさい。あなたがたを人間をとる漁師にしてあげよう。」（マルコ 1:17）魚は

「この世に生きる人々」を象徴し、海は「この世そのもの」、あるいは「深淵」「裁き」「混沌」を象徴します。その中に生きる魚は、救いへと招かれる者たちの姿を映します。

しかし同じ海には、巨大な生き物も造られました。第五日目の創造は、神が「良かった」と宣言された善の業です。その善の業のただ中に、海の巨獣の存在があえて置かれたことは、創造の御業が、やがてキリストを通して完成へと至る物語であることを信仰者に悟らせる徴なのだと思われ受け止められます。

創世記1章21節にある「海の巨獣」は、ヘブライ語で タンニーン (תנין) と呼ばれ、後の時代には「レビヤタン」として語られる存在と結びつきます。レビヤタンは、旧約聖書の中でしばしば敵対する力、神に逆らう勢いの象徴として描かれます。「その日、主は…逃げる蛇レビヤタンを罰し、曲がりくねる蛇レビヤタンを罰し、海にいる竜を殺される。」（イザヤ27:1）しかし創世記では、この巨獣もまた神の手によって造られたものとして語られます。祝福される命と、敵対する力の影が、同じ海に共に置かれているのです。この「共存」は、救済史の緊張を原初の段階で示すものです。救われる者と敵対する者が同じ世界に置かれ、やがて終末において分かれたという流れが、この中には示されています。

そして、この構図が第五日目に置かれたことは偶然ではありません。揺らぎと混沌を含む海の中に、祝福される命と敵対する力が同時に現れるという事実そのものが、歴史の中で繰り返される救いの物語を先取りしています。第五日目は、命が祝福のもとに置かれながらも、敵対する力の予表が存在するという、救済史の中での緊張——神の贖いのご計画が創造の御業の中に証しされた日です。

1-2. 空の鳥 — 天と地の間に置かれた存在（靈的干渉の領域に生きる命）

空を飛ぶ鳥は、天と地の間に広がる大空に生きる存在です。天に届かないが天を目指し、地に巣を作るが地に縛られないというその姿は、天と地の間に置かれた存在の象徴として読むことができます。鳥そのものは靈的勢力ではありません。しかし、鳥が生きる「大空」は創造第二日目に分けられた領域であり、聖書全体を通して靈的な働きが行われる場として描かれます。御使いが上り下りする場（創世記28:12）、祈りが妨げられる場（ダニエル10章）、「空中の権威」が働く場（エペソ2:2）。

鳥は、この靈的干渉が起こる領域に置かれた命の象徴です。そのため鳥は、しばしば諸国民の動きや、靈的な働きの影響を受ける者として描かれます。主は「からし種の譬え」で「空の鳥が来て、その枝に巣を作るほどになる」（マタイ13:32）と語り、御国に諸国民が集う姿を示されました。一方で、種まきの譬えでは「すると空の鳥が来て食べてしまいました」（マルコ4:4）と語られ、鳥は「御言葉を奪う者」として描かれます。

ここには、靈的領域で働く力が地上の現実に干渉するという象徴が込められています。鳥は、天を求める者として、また諸国民として、さらに靈的領域に置かれた存在として読むことができます。第五日目に鳥が造られたことは、天と地の間で靈的な働きが交わる領域に命が置かれたという、創造の深い意味を示していると思えます。

1-3. 定まらない領域に置かれた命と、祝福の先行

海と空に共通するのは、それが「完成の場」ではなく「途中の場」であるということです。海は深淵を含み、空は天と地の間に広がり、どちらも不確かさと未確定性を抱えています。そのような領域に命が置かれ、そこで祝福が語られたという事実は、神が「定まらない場=揺らぎの世界に生きる命」を初めから想定しておられたことを示します。

祝福は安定した大地の上ではなく、揺らぎを含む場において語られました。命が安息を得る前の、未完成の状態において祝福が与えられたのです。天の父は善人にも悪人にも太陽の恵みを与えられる方であり、命が歩むために必要な祝福を惜しまず注がれます。

この世の海のように混沌を抱え、空の鳥のように天と地の間に置かれた存在として緊張を帯びながら歩む者に、神の祝福はなお満ちようとしています。敵対する力が存在しても、その働きは揺らぐことなく続いています。

祝福は先に語られ、完成はその先に備えられています。この置かれた命の姿は、信仰者が生きる世界の姿と通じます。未完成のこの世界にあって、第五日目に置かれた命の姿が重なります。揺らぎの中に置かれた命に、神は先に完成を見据えて祝福を語られた——その創造の秩序が、信仰者の歩みの原型となっているのです。

1-4. 第五日目は、人間の存在の前触れ

第五日目の命は、人間の存在のさまざまな側面を先取りしています。海の魚は救われるべき者の姿を映し、鳥は、人間が天と地の間に置かれ、霊的干渉の中で生きる存在であることを映し、巨獣は敵対する力の影を示します。これらすべてが、人が生きる世界に先立って置かれています。人は、救われるべき者としての弱さを持ち、天を求める心を持ち、同時に敵対する力の影響を受けて歩む存在です。

第五日目の命は、人間の存在の条件を象徴的に示しています。

2. 海に満ちる命と救い・敵対・終末をめぐる黙想

第五日目の創造において、神はまず「水に群がる生き物」を造られました。

「水には生き物が群がれ。」（創世記 1:20）

海は創世記の初めから「深淵」「大水」「混沌」と結びついており、その中に命が満ちるという出来事は、単なる自然描写ではなく、救いの物語の原型として読むことができます。海は、聖書全体を通して「この世」「深淵」「裁き」「死の影」を象徴します。その中に生きる魚は、救われるべき者の象徴として語られます。しかし同時に、海には「巨獣」も置かれました。この二つの存在が同じ海に共存することは、救済史の緊張を原初の段階で示しています。

2-1. 海=この世・深淵・裁きの象徴

創造の初めをこう描きます。

「地は茫漠として何もなく、やみが大水の上であり、神の霊が水の上を動いていた。」（創世記 1:2）ここでの「大水」は、形を持たず、区別されず、深淵のように描かれています。

旧約聖書では、海はしばしば「混沌」「裁き」「死の領域」と結びつきます。ノアの洪水（創

世記7章）、イスラエルが通った紅海（出エジプト記14章）、ヨナが投げ込まれた海（ヨナ1章）。これらはすべて、海が「裁きの場」「死の影」「深淵」を象徴することを示しています。その海に、神は「命が群がるように」されました。これは、死の影の中に救いの対象が置かれるという象徴的意味を持ちます。

2-2. 魚＝救われるべき者の象徴（宣教の原型）

主イエスは弟子たちにこう言われました。「わたしについて来なさい。あなたがたを人間をとる漁師にしてあげよう。」（マルコ1:17）魚は「この世に生きる人々」、海は「この世そのもの」、網は「福音」、引き上げられることは「救い」を象徴します。

第五日目に海に満ちた魚は、救われるべき者の象徴としての原型です。また、終末の譬えでも魚は重要な象徴として扱われます。「良いものは器に入れ、悪いものは投げ捨てました。」（マタイ13:48）終末において、魚は「選別される者」として描かれます。

第五日目に海に満ちた魚は、救いと裁きの両方の対象としての人間の姿を先取りしています。

2-3. 巨獣（タンニーン）＝敵対的力の象徴

創世記1章21節は、魚とともに「海の巨獣」が造られたことを特別に記します。「神は、海の巨獣と…すべての生き物を創造された。」（創世記1:21）この「巨獣」はヘブライ語でタンニーン（תנין）と呼ばれ、旧約聖書ではしばしば「竜」「大蛇」「レビヤタン」と結びつきます。レビヤタンは、敵対する力、神に逆らう勢い、あるいはサタンの象徴として描かれます。

「主は…逃げる蛇レビヤタンを罰し、曲がりくねる蛇レビヤタンを罰し、海にいる竜を殺される。」（イザヤ27:1）、「あなたは海の竜の頭を砕かれました。」（詩篇74:13）、「あなたは…竜を踏み砕きます。」（詩篇91:13）。しかし創世記では、この巨獣もまた「神が造られたもの」として語られます。敵対的力ですら、神の支配の外にはありません。

第五日目に巨獣が置かれたことは、救われる者（魚）と敵対する者（巨獣）が同じ世界に存在することを示します。これは、救済史の緊張を原初の段階で示すものです。

2-4. ヨナ書との照応 — 深淵と救いの象徴

ヨナ書は、海と魚の象徴を最も鮮明に描く書です。ヨナは海に投げ込まれ、大魚に呑まれました。「主は大きな魚を備えて、ヨナを呑み込ませた。」（ヨナ1:17）海＝裁きの場、大魚＝異邦世界の中での保護、ヨナ＝イスラエルの象徴という読み方が可能です。

ヨナが三日三晩魚の腹にいたことは、キリストの死と復活の型として語られます。「ヨナが三日三晩大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩地の中にいる。」（マタイ12:40）第五日目に海に満ちた命を扱う、海と魚の象徴は、裁き・救い・復活というテーマを同時に含んでいます。

2-5. 海の象徴は、人間が置かれている現実を映す

海は、人が置かれている現実を象徴します。社会の混乱、歴史の揺れ動き、世界の不安定さ迫害、戦争、経済的・政治的混乱・・・これらはすべて「海」の象徴の中に含まれます。その中に生

きる魚は、この世の中で救いを求める人間の姿です。そして巨獣は、歴史の中で働く敵対的力を象徴します。

第五日目は、人が生きる世界の現実を象徴的に描いています。

2-6. キリストの勝利と「最後の敵としての死」

パウロは語りました。「最後の敵として滅ぼされるのは死です。」（1コリント 15:26）海の象徴は、死の影と深く結びついています。海に置かれた巨獣は、死の力の象徴でもあります。しかし、キリストは死に勝利されました。「死よ、おまえのとげはどこにあるのか。」（1コリント 15:55）

第五日目に海に満ちた命は、死の影の中に置かれた命が、やがてキリストの勝利によって救われるという救済史の流れを先取りしています。

2-7. 第五日目の海は、終末の光景へとつながる

黙示録では、海は次のように描かれます。「もはや海はなくなった。」（黙示録 21:1）これは、混沌、深淵、死、敵対的力、裁き——これらがすべて取り除かれることを象徴します。

第五日目の海は、救いと敵対、祝福と呪い、喜びと嘆きが共に存在する世界を示しますが、終末においてその緊張は終わり、新しい創造が現れます。

3. 空に満ちる鳥と、霊的志向・諸国民・空中の領域をめぐる黙想

第五日目の創造において、神は海の生き物とともに「空を飛ぶ鳥」を造られました。「鳥が地の上、天の大空を飛べ。」（創世記 1:20）鳥は、大空に身を置きながら地に巣を作る存在です。天と地の間に広がるこの領域は、創造第二日目に分けられた場であり、聖書全体を通して霊的な働きが交わる場所として描かれます。鳥の姿は、天と地の間に置かれ、上からの働きにも下からの働きにも触れながら生きる存在としての人間の姿を象徴します。

ここから、鳥の象徴が示すいくつかの側面を見ていきます。

3-1. 諸国民の象徴としての鳥

鳥は、聖書の中でしばしば諸国民の象徴として描かれます。ダニエル 4:12「その木の枝には空の鳥が住んだ」、エゼキエル 17:23「あらゆる種類の鳥がその木に住みつき」、マタイ 13:32「空の鳥が来て、その枝に巣を作るほどになる」。大空に集う鳥の姿は、御国に諸国民が集う象徴として語られます。第五日目に鳥が造られたことは、諸国民が救いへと招かれる神のご計画の原型として読むことができます。

3-2. 御言葉を奪う者としての鳥

鳥は、御言葉を奪う者としても描かれます。マルコ 4:4「空の鳥が来て食べてしまいました」、マルコ 4:15「サタンが来て、まかれた御言葉を取り去ってしまう」。鳥は、霊的妨害の象徴としても働きます。諸国民が救いへと招かれる一方で、同じ領域で御言葉を拒む力も働くという現実が示されています。

3-3. 霊的干渉の領域に置かれた存在としての鳥

鳥が生きる大空は、霊的な働きが交差する場です。エペソ 2:2「空中の権威を持つ支配者」、創世記 28:12「神の使いたちが、そのはしごを上り下りしていた」、ダニエル 10 章（祈りが妨げられる場）。鳥は霊的存在そのものではありませんが、霊的干渉の領域に置かれた命の象徴です。人はこの領域で、サタンの惑わしにも、御使いの導きにも応答しうる存在として生きています。

3-4. 終末の裁きの象徴としての鳥

黙示録 19 章では、鳥が裁きの場面に登場します。「すべての鳥よ、神の大宴会に集まれ。」（黙示録 19:17）鳥は、終末における裁きの象徴としても描かれます。第五日目に鳥が造られたことは、歴史の終わりに現れる裁きの構造を原初に示すものとして読むことができます。

3-5. 鳥は「人間の内側の揺らぎ」を映す

海が世界の揺らぎを映すように、鳥はその揺らぎの中で生きる者の内に生じる緊張を映します。天を求める心と地上の弱さ、御言葉を求める心と奪われる危険——これらの緊張は、天と地の間に置かれた存在としての人間の姿をも象徴します。

3-6. 第五日目は、人間の存在の前触れ

海の生き物は、人間が生きる世界の現実（歴史・混沌・敵対）を象徴し、鳥は、人間が天と地の間に置かれ、霊的干渉の中で生きる存在であることを象徴します。第五日目は、人間が生きる世界の現実と、人間が置かれた根源的な「位置」を先取りする日です。

4. まとめ

第五日目は、第三日目に地が現れ、第四日目に時のしるしが整えられた世界の中で、初めて命が置かれ、祝福が語られた日です。しかしその命は、完成した地ではなく、海と空という揺らぎと混沌、霊的干渉の領域に置かれました。そこには、救われるべき者、天と地の間に置かれた存在、敵対する力、霊的な働き、諸国民、終末の裁きなど、人間が生きる世界の現実と、天と地の間に置かれた存在としての「位置」が象徴的に先取りされています。

祝福はすでに与えられ、完成はまだ来ていない。その間に生きる命の姿が、第五日目に描かれています。

御国の完成に関する黙想

— 創世の第六日目 一体の人 —

創世記1章24節～31節

- 1:24 神は仰せられた。「地が、種類にしたがって、生き物を生ぜよ。家畜や、はうもの、野の獣を、種類にしたがって。」そのようになった。
- 1:25 神は、種類にしたがって野の獣を、種類にしたがって家畜を、種類にしたがって地のすべてのはうものを造られた。神はそれを見て良しとされた。
- 1:26 神は仰せられた。「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように。」
- 1:27 神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。
- 1:28 神は彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」
- 1:29 神は仰せられた。「見よ。わたしは、全地の上にあつて、種を持つすべての草と、種を持って実を結ぶすべての木をあなたがたに与える。それがあなたがたの食物となる。
- 1:30 また、地のすべての獣、空のすべての鳥、地をはうすべてのもので、いのちの息のあるもののために、食物として、すべての緑の草を与える。」そのようになった。
- 1:31 神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった。夕があり、朝があった。第六日。

I. 第五日目までの創造——舞台の準備

第五日目までの創造を黙想するとき、神が世界に与えられた準備が一つの頂点へと向かっていることが見えてきます。第一日目の光において御子の現れが示され、第二日目には天と地の隔てが置かれて天的現実と地的現実の秩序が形づくられ、第三日目には地が姿を現して神の御言葉が形を取り実を結ぶ場が整えられ、受肉・贖い・復活・教会の原型がそこに映し出されました。第四日目には時のしるしが置かれて主の日へ向かうための歴史と終末の秩序が整えられ、第五日目には命が海と空に満ち、主の日に至るまでの揺らぎの中に置かれた命が祝福を受け、人間が生きる世界の条件が象徴的に先取りされました。

しかしこれらの命はまだ「完成した存在」ではなく、海の生き物は深淵に置かれ救いを必要とする者の姿を映し、空の鳥は空を舞いながら地に巣を作る者として霊的志向と地上性の緊張を思わせ、巨獣の存在は敵対する力が世界に潜むことを示すような存在です。第五日目までの創造は、人が生きる世界の現実と、完全な人に先立つ、人の置かれる位置を先に提示する働きを持ち、海と空に満ちる命は、人間が向き合うことになる救い・葛藤・誘惑・敵対・祝福・完成への歩みを象徴的に示していました。

第一日目から第五日目までの創造の流れには、「完成へ向かう秩序」が通っており、これらすべては、神がご自身の目的のために地と時と命を整え、備えておられる段階でした。これまでの五日間の創造は、神のご計画の中心が置かれるための時と場を整える働きとして受け止められ

ます。このすべての流れが向かう先に、第六日目の「人間の創造」があります。

II. 第六日目の到来——創造の流れが収束する地点

そして第六日目に、神はこの世界の中心となる存在を造られます。被造物の一つとしての人ではなく、「神のかたち」として造られ、世界を担い、神のご計画の完成へと向かう存在です。「さあ、人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて」（創世記 1:26）第五日目までに示された象徴や準備、祝福と緊張は、この言葉に収束します。

第六日目の黙想は、「神のかたち」として造られた人間がどのような目的を帯び、どのような世界に置かれ、何を担う存在として造られたのかを覚えるものとなります。第五日目までの創造が御目的の準備であるなら、第六日目はその時と場に、最後のアダムである「キリスト」と、「完全な一人の人」とされた花嫁である教会とが、「一体の人」として結ばれる原型が登場する日です。

III. 完成の人の原型としてのアダム

第六日目は創造黙想全体の目的地であり、神のご計画の中心である「一体の人」、すなわちキリストと花嫁の結合の原型が地に現れる日です。第三日目に地が実を結んだように、その実りの最終形として人間が造られます。地は神の御言葉が形を取り実を結ぶ場であり、その地から生まれる人間は神の創造の実りの頂点として置かれます。

第二日目に天と地の隔てが置かれたことを思い起こすなら、第六日目はその隔てを越えて「神のかたち」が地に現れる日として読むことができます。天に属するかたちが地に宿し、天的現実が地上に反映される時でした。これは最後のアダムであるキリストが天から来られ、地において神のかたちを完全に現された出来事を覚えさせます。この隔てはその日の終わり——つまり、安息日に向かって、完成を待ちます。

神が人に与えた「支配」の權威について語られますが、神のかたちに似せて造られた存在としての人間の霊的役割を示すものです。人間は神の御心を地に反映する者として造られ、いのちの世界を治める責任を委ねられています。

IV. 動物の創造——助け手の不在と花嫁の前触れ

第六日目に動物が造られたという事実をまず書かれたままに受け取るなら、彼らは「支配せよ」と命じられた対象として人間の統治の摂理の中に置かれた存在です。地上の命が人間の働きのもとに置かれるという神のみこころを示しています。

創世記 2 章では、神がアダムの前に動物を連れてこられたとき、彼にふさわしい助け手はその中には見つからなかったと語られます。動物は助け手の候補として提示されましたが、契約の相手方としては不十分であり、人間と対等な関係に入る存在ではないことが示されました。人間と動物は決して同一の本質として語られる被造物ではない霊的な境界が定められています。

動物は地に属する命の完成形として、第五日目の揺らぎの中に置かれた命とは異なる性質を持っています。第三日目に地が実を結んだように、その実りがさらに豊かに展開し、命として地に満ちるのが第六日目です。動物は人間の創造に先立つ存在として置かれ、地が満ち整えられ、

準備が整ったことを示す合図となります。（→ 補足参照）

V. 裂かれた側から生まれる命——花嫁の創造の原型

第五日目までの創造の歩みは、光の出現から始まり、天と地の隔て、地の出現、時の秩序、揺らぎの中の命へと進んできました。そして第六日目、創造の物語はついにそのご目的の中心へと向かいます。

神はまず地に属する命を満ちし、地の豊かさを完成させられました。しかし、そのどれもが「助け手」としては不十分であり、神のかたちを映す存在の相手方にはなり得ませんでした。助け手の不在は、神がこれから造ろうとしておられる存在の特別さを際立たせる創造の御業の証しでした。

ここで創造の物語が展開します。神はアダムを深い眠りに落とし、その脇腹を開かれました。この「深い眠り」は死の型であり、脇腹が開かれるという出来事は、自然の秩序の中には存在しない命が裂かれた側から生まれるという神の道を示しています。神はアダムの骨と肉から女を造られました。

この象徴は、後にキリストの脇腹が裂かれ、血と水が流れ出たとき、そこから花嫁となる教会が生まれたという奥義を示しました。創造と贖いは同じ神の物語であり、神は贖いにおいて創造の御業を完成し、神の子の苦難を経て世に命を生み出される方です。「裂かれた側から命が生まれる」というこの象徴は、主イエスの系図——後にユダとタマルの間に生まれたペレツ（「裂け出る者」）の名として、ルツ記の結婚物語の中で展開されていきます。人間の秩序ではなく、神の介入によって開かれる裂け目から命が現れるという、聖書全体の一貫した神の方法を示します。

「われわれに似るように、われわれのかたちに人を造ろう」（創世記 1:26）。

創造の御目的がここで明らかになります。人は地の命の延長ではなく、霊的な存在として神のかたちを帯びる者として造られました。男と女として造られ、一体となるように定められたこの存在は、神の永遠のご計画の中心です。

VI. パウロの奥義——創造の頂点としての啓示

男と女が「一体となる」という言葉は、創造の物語の中で最も深い霊的意味を帯びています。それは後にパウロが「この奥義は偉大です。私はキリストと教会について言っているのです」（エペソ 5:32）と語った結婚の奥義です。創造第六日目は、キリストと花嫁の結合という永遠のご計画が象徴として地に現れた日です。

男と女は互いに補い合う存在というよりもむしろ、ひとつの栄光を共有する存在として造られました。「私の骨からの骨、肉からの肉」とあるこの骨は、存在の本質・中核を表す語で、この肉は、命・性質を共有する存在としての言葉です。「二人は一体となる (בָּשָׂר אֶחָד (basar echad))」は、肉(存在・生命体)が一体(一つに結ばれる)という語です。二つの存在が結合して新しい一つの存在となるという意味があります。

ここに創造の御目的があります。神のかたちとは孤立した個に示される存在にではなく、愛によって結ばれた交わりの中においてかたどられるかたちであり、その交わりのうちに神の栄光

が映し出されます。また「支配せよ」という言葉は、神のかたちを帯びた者が神の愛のみこころを共有する霊的な存在として、地を祝福し命を守り、神の御心を地に反映する霊的責任を示しています。そして神は「非常に良かった」と言われました。神の御業が満ちたときのこの言葉は創造の完成直前に置かれ、新しい創造の前夜のことば（「時はきた」）と同じ響きがあります。神のかたちを帯びた「一体の人」が地に現れたとき、創造の御目的は姿を現しました。

Ⅶ. 第六日目の最終章——創造の御目的としての「一体」の奥義

創世記の創造物語は、第六日目においてついにその御目的を果たします。

男と女が「一体となる」と語られたこの言葉は、夫婦関係の説明で終わるものではなく、神の創造の御目的そのものを示す言葉です。

神のかたちは単独の存在では完成せず、愛によって結ばれた交わりとしての「一体の人」において完成します。ゆえに、御子が神のかたちとして地に現れるとき、その完成は御子おひとりではなく、花嫁との一体によって現れます。

創世の御業を覚えるなら、女は男の脇腹から取られた骨と肉によって生きる存在として造られ、男の栄光を映し出す同一の存在として「一体」として立てられました。この「骨からの骨、肉からの肉」という言葉の中には、存在の共有、命の共有、そして栄光の共有という深い同一性が示されています。

父と御子が一つであられながら個として知られるように、アダムとエバの一体もまた、存在を共有しながら個が認識されるという一体的栄光の写しです。しかし、この世ではその栄光が完全には現れず、本来一つである存在が別々のものとして扱われています。これは墮落した世界の不完全さであり、一体の栄光が隠されている状態です。

アダムの脇腹が裂かれ、そこから取り出された骨によって女が生まれたという出来事は、創造の中に置かれた最も深い象徴です。裂かれた側から命が生まれるという神の道は、後に御子のご自身の肉を裂かれ、血と水を流し、裂かれた肉から花嫁となる教会が生まれるという贖いの出来事において創造の御目的を成就しました。贖いは創造の御業の中に証しされ、神の創造は贖いの御業によって成就します。神は裂かれる側から命を生み出される方です。

御子が罪びとである私たちを買い取るためにご自身を捧げられたとき、そこには御父と御子一つであられた愛の完全な現れが示されました。この犠牲の愛こそが、花嫁へと整えるための源です。教会(女)は御子のへりくだりと愛の行為を受け取り、その贖いの愛と復活の命を共有し、御子の愛を帯びて生きる者として形づくられます。教会(女)が御子の愛に応答し、その愛を自らの愛として捧げるとき、教会(女)は御子と同じ愛を生きる者となり、成熟した完全なひとりの人——整えられた花嫁とされ、その花嫁のうちに御子の栄光が現れます。こうして愛の一致、命の共有、心の結合、存在の結合のすべてが満ちる、完全に一つとされた「一体の人」がかたちづけられます。

整えられた者として、キリストの御前に相応しい存在として立たせられるとき、キリストの光はその「完全な一人の人」とされた花嫁の光と一体の関係にあります。キリストと同じ光に輝くというとき、主が十字架の贖いの前夜、「父よ。あなたの子があなたの栄光を現すために、子の栄光を現してください。それは子が、あなたからいただいたすべての者に、永遠のいのちを与え

るため、あなたは、すべての人を支配する権威を子にお与えになったからです。・・・あなたがわたしに行わせるためにお与えになったわざを、わたしは成し遂げて、地上であなたの栄光を現しました。今は、父よ、みそばで、わたしを栄光で輝かせてください。世界が存在する前に、ごいっしょにいて持っていましたあの栄光で輝かせてください。」（ヨハネ 17:1-5）と祈られた、その御父と御子との一体の関係と同じことが、キリストとキリストに結ばれる者との間に在るのです。そして、「神は実にそのひとり子をお与えになったほどに世を愛された」その愛を、御父と同じ栄光の輝きの中で御子のご自身を御父の御前に差し出されたのでした。（→ 補足2）

この愛の共有なしに、花嫁が『完全な一人の人』として整えられることも、キリストと結ばれて『一体の人』となることもありません。神の創造の御目的は初めから、御子にあってこの一体を成し遂げることであり、ここに創造と贖いと完成を貫く真理の開示があります。

世界の基が置かれる前から、神は御子にあって教会（主の花嫁）を選び、この一体の完成を見据えて創造を始められました。創造はその舞台であり、歴史はその準備であり、贖いはその道であり、終末とはその完成です。

ルツ記は、この奥義を映し出しました。買い戻し、愛の受け取り、一体となる結合、そして新しい命の誕生。裂け出る者ペレツの名が示すように、神の命は裂かれ、神のとられる手を通して、新しい命をご自分のものとして生まれさせました。御子の愛が花嫁に共有され、花嫁がその愛を帯びることによって現れる栄光のことです。花嫁が自分を買い取ってくださった方の、その愛を帯びる、とはどういうことか。その愛に至る、その愛に入るとはどういうことか。女は、男からとられました。すべての支配の権威も人に置かれました。その御業の光景が主の祈りを通して完成の人を描きます。

御子と花嫁が一体となると、創造の御目的は満たされ、世界は安息に入ります。創世記2章の安息は、創造の御目的が満たされたときに訪れる完成の安息を映すものであり、その前に置かれた「ふたりは一体となる」という言葉は、安息に至る御業がキリストと教会の一体という結婚の奥義にあることを示しています。新しい天と新しい地の平安とは、御子と花嫁の一体とされた栄光が世界全体に満ちた状態であり、愛の共有が完成した世界の姿です。この愛の本質が、安息に至らしめる贖いの愛であり、そして御子の光が同一のものとして輝く主の花嫁の輝きだということなのです。

創造の第一日目から第六日目までのすべては、この一点——御子と花嫁の存在を一つとする「一体の人」の目的に向かって流れていました。ここに、創造の目的・贖いの目的・終末の目的を貫く真理の光が当てられます。「ふたりは一体となる」——この奥義は偉大です。パウロは「私はキリストと教会について言っているのです」と語りました。

創造の第六日目は、この永遠の奥義が地に象徴として現れた日です。

補足1： 獸的象徴・諸国・終末の平和の秩序

旧約において異邦人がしばしば獸的象徴で語られるように、動物は契約の外にある者、秩序の外にある者の象徴として理解されてきました。これは侮蔑ではなく、神の民との契約関係の外側にある立ち位置を示す象徴的分類です。

終末預言においても獸的な諸国、敵対する勢力、神に逆らう者が登場しますが、「狼は小羊とともに住む」という平和的共存のビジョンが語られ、終末において諸国が神の平和の秩序に組み込まれ、敵対が終わり、互恵的な関係が回復される象徴的な光景が示されます。

補足2： 栄光の共有

ここで示されていることは、次のように言うことができます。神のかたちとは、御父と御子の一体の関係そのものが「かたち」である。御父と御子の一体の栄光が原型であり、そのかたちに似せて人が造られ、そのかたちに似せて花嫁が完成し（完全な一人の人となり）、その栄光が満ちるとき、世界は安息に入ります。

御父と御子の創世の初めからの栄光については、ヨハネ 17 章の御言葉によって覚えます。贖いの前夜、父と御子の一つの関係の中で、御子は「栄光」と「支配」について祈られました。御子が神の栄光の輝きとしてご自身の栄光を語られるとき、それは御父の愛においてご自身をお捨てになった贖いの愛の現れでした。この愛の輝きこそが、御子の栄光の本質です。そして、この栄光の輝きによって、暗闇にあった者が命を得るに至るという贖いの業が成就します。御子に与えられた命が、御子によって与えられる命として現れ、その命の働きの中に御子の御支配があります。

このビジョンと同じことが、神の創造の御計画に描かれていました。このヨハネ 17 章の事実は、創世記の場面と深く共有されています。創造の御計画と贖いの御旨は同質のもので、奥義として語られた一体とされた者のうちに、買い取られた方の栄光がその者の本質として輝くときのことを、神は見ておられます。それが「われわれのかたち」です。御子の栄光と御父の栄光は同じ輝きであり、同じ本質でひとつです。その一体の「われわれの形」に似せて、御子と完全な一人の人（花嫁）とは一体とされ、花嫁は自身の栄光を御子の栄光と同じものとして輝かせます。そして、その栄光が満ちるとき、世界が支配される日のことを、神は完成の日、安息の日として見据えておられます。

アダムとエバの一体——すなわちキリストと教会の一体——とは、創世記で、そしてまた贖いの前夜ヨハネの福音書で「栄光」と「支配」が語られたように、花嫁はその愛によって『完全な一人の人』として成熟し、贖いの愛の栄光が満ちるときに「一体の人」としてキリストと結ばれ、世界は完成へ、すなわち安息へと導かれるという真理を示しています。

補足3： 創造以前のあの栄光

創造以前に御子が御父とともに持つておられた「栄光」とは、永遠の過去における抽象的な内的関係として理解するよりも、創世記に象徴として示されている**創造の目的としての栄**

光を指していると考えたほうが良いと思います。なぜなら、人として来られた御子は、「父が語れと言われたことを語り、父が見せられたことを行う」方であり、御父の御旨を旧約に示される象徴に根ざさない概念をもって語られることはないからです。

私たちはこれまで、創世記に置かれた光、隔て、地、時、命、裂かれた側、一体の人、安息といった象徴を黙想し、その意味を探ってきました。しかし主御自身は、私たちが象徴を通して部分的に見てきたものの背後にある「創造の御目的の内的な真実」を、初めから完全にご承知のお方です。御子は創造の証人として、創造の御旨を初めから知っておられました。ですから、ヨハネ 17 章で御子が「創造以前の栄光」を祈りの中で語られたことは、創世記に示されてきた創造の御旨に根ざした必然の言葉であり、創造の目的そのものを証しする祈りです。御子は永遠の御旨を知る者として、十字架においてその御旨を実行される直前に、創造以前の愛の栄光を祈りの中で言い表されたのだと思います。

創造以前とは、創世記一章一節から第六日までに示される御計画の段階を支えている、創造の御業の動機となった御旨の時のことです。そこに置かれた象徴のすべては、**御父が御子のために万物を造り、御子にすべてを渡すという御目的**を示唆しています。第一日目の光は、御子が創造の中心として現れることを象徴し、神のかたちとして造られる人間は、御子の前に立つ「完全な一人の人」としての目的を帯びています。創造の全体は、御子のために万物を造り、御子の前に完全な人を連れてくるという御父の御計画の展開であり、この目的そのものが「一緒に持っていた栄光」です。

ですから、「創造以前の栄光」とは、御父と御子が共有しておられた**創造の目的の現れとしての輝き**であり、御父が御子にすべてを渡すという御計画の光です。創造の象徴は、この目的の光を地上に映し出すものであり、創造の第一日目から第六日目までのすべては、この目的に向かって流れています。

この創造の目的は、歴史の中で「贖い」という形で実現します。御子が十字架でご自身を捧げられた愛の行為は、創造以前に御父と共有していた目的の栄光が、歴史において形を取った出来事です。御子は、御父から与えられた者を完全な一人の人として御前に立たせるために、ご自身を捧げられました。ですから、贖いは創造の目的を成就するための愛の行為であり、創造以前の栄光が歴史に現れた姿です。

この視点に立つと、ヨハネ 17 章の祈りが自然に理解できます。御子が祈りの中で繰り返して語られる「あなたがわたしに与えられた」「あなたがわたしに渡された」という言葉は、創造以前の目的——御父が御子にすべてを渡すという御計画、すなわち御子と栄光を共有する者（完全な一人の人）を御子に渡すという御旨——をそのまま言い表しています。御子が「創造する前から一緒に持っていたあの栄光で、わたしを輝かせてください」と祈られたのは、十字架において創造の目的が最も深く実現し、御父と御子が共有していた目的の栄光が、愛の行為として歴史に現れるからです。

こうして、創造以前の栄光、創造の目的、贖いの愛、そして完全な一人の人の完成は、別々の次元の出来事ではなく、御父が御子にすべてを渡すという一本の目的の線上にあることが明らかになります。贖いは、創造の目的を実行する愛の行為であり、御父と御子が初めから共有しておられた栄光が歴史に輝くときです。完成とは、創造の目的が実現し、完全な一人の人が御子と結ばれ、その栄光を共有するとき——安息が全きかたちで世界に現れる時です。

御国の完成に関する黙想

— 創世の第七日目 — 全き完成、聖とされた安息 —

創世記2章1節～3節

2:1 こうして、天と地とそのすべての万象が完成された。

2:2 神は第七日目に、なさっていたわざの完成を告げられた。すなわち第七日目に、なさっていたすべてのわざを休まれた。

2:3 神は第七日目を祝福し、この日を聖であるとされた。それは、その日に、神がなさっていたすべての創造のわざを休まれたからである。

1 創造の第七日の安息——創造・贖い・完成の中心

創造の第七日に神が御業を終え「休まれた」と記されたことは、完成した御業の上に座し、統治を開始される神の安息を示すものであると、受け止められます。この安息は、創造の目的が果たされた全き完成の光景として、臨在の栄光が世界を覆う安息と思います。創造の第七日目の安息は、贖いと完成の安息を指し示すものとして最初に定められ、新しい天地の創造の成就を先取りする預言的な日として黙想します。

創造の七日間の天地の創造は、万物の起源の記録として覚えると同時に、神の永遠の御旨が象徴として地に刻まれた、天に置かれた事実を指し示すしるしであり写しです。

第一日目の光、第二日目の隔て、第三日目の地、第四日目の時のしるし、第五日目の揺らぎの命、第六日目の一体の人、そして第七日の安息——これらすべては、御子と花嫁の一体という奥義を中心に据えて証しされています。

2 創造の六日間に示された象徴の黙想

これまで以下のように創造の六日間の象徴を黙想してきました。これらの象徴は、それぞれが七日目の安息に向かう流れの中で意味を持っています。

第一日目の光

第一日目の光は創造のはじめに中心に据えられた本体の光であり、御子の現われでした。世界の基の置かれる前に万物の支配者、御国の王として任命された主の栄光です。こうして光は、後に訪れる完成の安息の中で輝く栄光を示す最初のしるしとなります。

第四日目のしるし

第四日目に置かれた太陽・月・星は、天の栄光を語り告げるしるしであり、歴史を主の日へ導く秩序でした。本体の光が現れるとき、しるしは役割を終えます。黙示録は「都は太陽も月も必要としない。神の栄光がこれを照らし、小羊がそのともしびだからである」（黙示録21:23）と語っています。

七日目は、最初の光の現われ（第一日）から光の満ちる時（第七日）へ至る創造の定めが完成する日です。第一日目に現れ、第四日目にしるしが置かれ、第七日目に満ちるといふ、創造の物語は光の現れから満ちる時へ向かって進みました。

第二日目の隔て

第二日に置かれた「隔て」については、創造から終末まで貫く秩序として後の章で詳しく扱います。ここでは、終わりの日に断絶が取り除かれる安息の世界を前もって示します。

第三日目の地

第三日目に水が一所に集められ、地が現れ、御言葉が形を取り、命を生み、実を結ぶという創造の摂理が、肉を取られたキリストの姿、贖い、復活、そして教会の働きと象徴として重なり合う日として黙想することができます。また御言葉が地に形を取り実を結ぶ宣教の場が整えられたことを覚えました。整えられた地は、安息の日に完成へと導かれる世界の土台となります。

天に上られた御子は、成し遂げられた御言葉による御業のゆえに、御座に着座し、安息に入られました。七日目に安息について記述されるように、地においての安息は、完成の日に天にある方がおりてこられる日に全うされます。

第五日目の被造物と安息への希望

第五日目の、空と海——すなわち、終末的完成を待つ被造物の状態（この黙想では「揺らぎ」と呼ぶ）、そして混沌の中に置かれた命は、救いと敵対が共存する世界を象徴するものとして覚えました。神はその只中で創造された命を祝福され、やがて訪れる完成を見据えつつ、新しい創造における七日目に神の聖に与る栄光に入る希望を抱くよう導かれました。

第六日目の神のかたちにかたどられた人

第六日目に神のかたちに人が形造られたとき、創造の目的が象徴として現れました。男と女の一体はキリストと花嫁の一体となる奥義の原型であり、裂かれた側から生まれる命は、創造の出来事と贖いの出来事が同じ本質を持つことを示す最も深い象徴でした。

第七日目の安息は、御子と花嫁の栄光を一つに共有する「一体の人」が地に顕れる、その完成の日を指し示す型として置かれたものでした。

3 七日間の流れの総合——創造の御目的と終末の安息

創造の七日間は、六日間の働きの後に安息が来るという順序の説明で語りつくされるものではなく、七日目こそ初めから御計画されていた目的であり完成の中心です。

第一日目の光は御子の栄光の現われとして置かれ、第二日目の隔ては、天と地が神の時に結ばれるための秩序として形作られ、第三日目の地は御言葉が形を取り実を結ぶ場として整えられました。第四日目の時のしるしは歴史を主の日へ向かわせ、第五日目の揺らぎの世界での祝福は、救いと敵対の緊張での希望を象徴し、第六日目の統治者として置かれた「一体の人」は御子と花嫁の同一の存在の原型として現れました。

これらすべては、七日目の安息——御子と花嫁の一体が完成し、その栄光が御父に返され、神がすべてにおいてすべてとなられる世界（1 コリント 15:28）——へ向かって進んでいました。七日目は、創造の目的を果たす日です。御子と花嫁の一体の人の顕れ、贖いの完成、断絶の終わ

り、統治の開始、満ち満ちた栄光として置かれました。

創世記で第七日だけ「夕があり、朝があった」と語られないのは、この安息が終わりを持たず、光が沈むことなく、神の臨在が永遠に続くことを示しています。黙示録の「もはや夜がない」というみ言葉と通じています。

4 隔ての取り除きと御子の着座——創造から終末まで貫く神の秩序

4.1 創造における境界——天と地を区別する秩序

第二日目に置かれた大空は、創造の秩序として天と地を区別する境界でした。上の水は神の側の領域、下の水は地における御言葉の成就を象徴し、その間に張られた大空は、神の御住まいと地の被造物の場が区別されることを示す象徴として理解できます。

罪の歴史の中では、この大空はイスラエルに証された幕屋の原型とも似ており、至聖所と聖所を隔てる垂れ幕のように、「聖」と「俗」とを区別する霊的な断絶を象徴する領域としても黙想することができます。第四日目に置かれた太陽・月・星は、天の下で時を刻むしるしとして働き、歴史を主の日へ導く秩序となりました。天地の境界の中に置かれた大空は、地のものと天のものが交錯する霊的な活動がなされる領域としてその象徴を覚えました。同時に罪による断絶の象徴としても働いていたと言えます。

4.2 十字架における断絶の終わり——聖とされるその日

御子のからだは十字架で裂かれたとき、罪によって生じた神と人との断絶は取り除かれました。御子の肉体は神殿（幕屋）の垂れ幕であり、その裂かれた肉体——贖いによって、天と地の断絶は取り除かれます。キリストは聖であられ、地に住む私たちは、この方によって地にありながらも天の者として区別される聖に与るものとされます。

「主は言われた。『わたしの右の座に着いていよ。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまでは』」（詩篇 110:1）とあるように、御子は、神の右に着座されました。御子の着座は、天において罪の隔てが取り除かれたことの実体であり、創造の第七日の安息の出来事が天において確立されたことを表しています。そして、地においては、完全な一人の人の顕れ、そして一体の人を通して地の贖いが全うされる時を、すなわち第七日の安息の日を待っています。

キリストの復活と着座によって、天において確立された現実が地に向かって開かれ、その実体が地において展開されていく救いの物語（地上の宣教）は、被造物が待ち望んでいた世界の「贖われること」への終末の始まりを告げます。

隔てが完全に取り払われる出来事は、キリストの復活を通して、つまり、朽ちるものが朽ちないものを着るとき（1コリント 15:53）に、神の栄光に入ります。すなわち「聖」とされることを示しています。罪によって生じていた断絶は終わり、地には御子の完全な御支配とその現われに伴って、聖なる臨在のもとに置かれる終末的安息が現れます。その意味で、7日目を「その日を聖とされた」と主が宣言されたことは、完成のその日に、地が贖われ、神（御子）の臨在によって、神の栄光が覆うことを示しています。神のおられる場所が、聖であるからです。

4.3 被造物のうめき——贖われる地への希求

パウロが語るように、被造物は「神の子たちの現れを切に待ち望んで」（ローマ 8:19）います。墮落以降、被造物は虚無に服しつつも、贖われる時を待ち望んでうめいています。朽ちる肉体が贖われなければ栄光に入れないうように、被造物の住むこの地も贖われなければ神の栄光に入れません。被造物のうめきは、地が新しい地へと贖われることへの希求です。パウロは、被造物が「滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由に入る」（ローマ 8:21）という約束の成就の日があることを指し示しています。

4.4 復活と着座——天に現れた第七日の実体

御子の復活は、新しい創造の第一の出来事であり、御言葉が地において再び実体として形を取り始めた「第三日の実体」です。しかし、第七日の実体は着座にあります。御子が天に上り、父の右に着座されたとき、創造の第七日の安息が天において実体として現れました。これは、天において隔てが取り除かれ、安息と統治が確立されたことを意味します。地においては、この天の現実が部分的に現れ始め、最後の日に完全に満ちることとなります。

4.5 着座の神学——王権・安息・一致の中心

御子の着座は、創造の第七日の実体であり、贖いの完成であり、王権の確立であり、断絶の終わりであり、光の満ちる時の始まりであり、御子と花嫁の一致の中心です。御子は御座にあって休まれつつ、御霊を通して地に働いておられ、教会は御霊とともに働き、花嫁の「完全なひとりの人」としての整えは歴史の中で形成されていきます。

やがて、すべての敵が足の下に置かれ、最後の敵である死が滅ぼされ、万物が御子に従わせられるとき、御子はそのすべてを御父に返され、「神がすべてにおいてすべてとなられる」（1コリント 15:28）という言葉が成就します。黙示録 21～22 章に描かれる新しい天と新しい地は、この安息の実体であり、神の幕屋が人とともにあり、死はなく、いのちの川が流れ、いのちの木が実を結び、御顔を仰ぎ見る者が永遠に仕える世界です。

4.6 御子における天と地の一致——開かれた天の現実

御子の着座は、贖いの完成と天における断絶が取り除かれたことを示します。創造の第七日を天においてかたどる安息が歴史の中に実体として現れたことを意味します。天において確立された現実が地に向かって開かれ、その実体が歴史の中で現れ始めるという関係として理解します。

御子は天の門であり、天の道であり、ヤコブの梯子の幻が意味することの実体です。ナタナエルに語られた御使いたちが人の子の上を上り下りするという言葉は、天と地の行き来が御子において開かれたことを示します（ヨハネ 1:51）。キリストにおいて結ばれ、天が開かれ、地に天の現実が成就する福音と御国の実現の開始です。

天においてはすでに完成した霊的現実が確立され、地においてはその現実が部分的に現れ始めました。このことは、創造の第三日目において御言葉が地に形を取り始めた象徴が、歴史の中で動き始めたことを示します。被造の世界は、キリストにあって神の聖に与る「始まり」に入れ

られましたが、その完全な姿は最後の日に現れます。

5 七日目の安息——神の家・礼拝・聖の顕現

七日目は、神の臨在が満ちる神の御住まいを思わせる光景です。詩篇には「私はいつまでも主の家に住みます」と歌われ、「あなたの家に住む人は幸いです」と告白されたその家——神と人が共に住む場所——が、七日目の安息の中に象徴として置かれています。

礼拝とは、この第七日の安息の中に入り、神の臨在に身を置くことです。「安息日を聖とせよ」とは、人が自らを清めるのではなく、神がとどまられるその時と場所に身を置くことを意味します。

創世記が「第七日を聖とされた」と語る時、創造の目的が現れました。その日を聖とされた、聖とは、神の臨在が満ちる場所であり、神の愛と栄光が世界を覆っている光景を描きます。御子の臨在と御支配によって地が完成へ導かれる終末の光景なのです。第四日目の太陽・月・星の光は役割を終え、第一日目の光の本体がすべてを照らします。七日目は、御子の安息（天の完成）と神の民の安息（地の完成）が一致する日です。御子の安息はすでに天において実体として到来していましたが、地における安息は最後の日に完成します。この日、創造の第七日の「神の聖」が歴史の中で実体として現れました。

6 七日目の完成——新しい創造

七日目には、御子と花嫁は「一体の人」として同じ栄光に輝き、すべての業を終え成し遂げられたことが宣言されます。そして、その栄光が父に返される日です。創造の物語は初めからこの一点へ向かって流れていました。天にある現実が地に届くまでの間に、隔てが置かれ、御子を証しすることばが与えられてきました。人は地を治めるために地に置かれましたが、その支配は、終わりの日（整えの完了の時）には「一人の完全な人（花嫁）」によって、完成の日（結ばれる時）には「一体の人」によって、神の御計画を果たします。

創造の物語は、第一日目の光の最初の現われから第七日目の光の満ちる時へ向かう定めが弧を描くように流れていますが、創造・贖い・完成・新しい創造という神の永遠の御旨が七日間の象徴の中に置かれていたと受け止められます。七日間は、創造と完成を貫く霊的な神の御計画と御目的を示す定め（秩序）であり、一体の人（御子と花嫁）の栄光に関する、永遠の奥義が、光・隔て・地・時・揺らぎ・神に形作られた人・安息という象徴の中に表されていると受け止められます。

エペソ 1:10

「時が満ちるにしたがって実現される御計画とは、天にあるものも地にあるものも、一切のものがキリストにあって一つに集められることです。」

I コリント 15:28

「すべてのものが御子に従わせられたとき、御子自身も御父に従われ、神がすべてにおいてすべてとなられる。」

この度の 創世の7日に関する終末的完成の黙想は以上です。

補章1 キリストの歩みに刻まれた七日の型

創造の六日間は「一体の人」へと至る流れを示しますが、その象徴はキリストの歩みの中で歴史的に表されています。御子は第一日目の光として現れ、第二日目の隔ての秩序の中で歴史が進み、第三日目の御言葉の顕現として受肉し、第四日目の時の秩序の中で十字架の時間が満ち、第五日目の揺らぎのただ中で敵対を受け、六日目の最後のアダムとして裂かれた側から花嫁を生み、七日目の安息として御座に着かれました。

創造の七日間は、贖いの七日間であり、完成の七日間であり、新しい創造の型として与えられた七日間です。

御座に付かれた主が今に至るまで働いておられる姿は、御子が地上で宣教の働きを為さり、安息日に癒しの御業をされたとき、「わたしの父は今に至るまで働いておられます」（ヨハネ 5:17）そのため、わたしも働くのだと示されたように、主御自身は御座に着かれつつ信仰者の手を通して御業を進められていきます。「主は彼らとともに働き、御言葉に伴うしるしをもって御言葉を確かなものとされた」（マルコ 16:20）。

■ ヨハネ 1:3-4, 9

「すべてのものはこの方によって造られた。…この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。…まことの光が世に来ようとしていた。」

■ ヘブル 1:3（着座）

「御子は…万物を御言葉の力によって保っておられます。罪の清めを成し遂げて、天の高い所におられる大いなる方の右の座に着かれました。」

■ I コリント 15:45（最後のアダム）

「最初の人アダムは生きる者となったが、最後のアダムは命を与える御霊となりました。」

補章2 第三日の実体と第七日の実体——復活と着座の二段階構造

創造の物語において第三日は、天上の水と地上の水とに分けられ、地が形づくられました。天にあるみ言葉が地に形をとって現れる出来事は、旧約の最初の時代から歴史全体に連続と流れ続けてきた姿です。

アブラハムの召し、出エジプト、契約、神殿、預言者たちの働き——これらはすべて、神のみことばの地に実現する光景です。その中で、最も深い形での実体化、すなわちその中心（最奥）として、贖いのキリストの死と復活があります。復活は、新しい創造の第一の出来事であり、御言葉が再び地において実体として形を取り始めた「第三日の象徴的成就」として理解できます。しかし、御子の復活は地における第七日の完成ではありません。復活された御子が天に上り、父の右に着座されたとき、創造の第七日の安息が御子にあって天において実体として現れました。これは、罪によって生じていた断絶が終わり、天において安息と統治が確立されたことを意味します。そして、この天において確立された現実が地に向かい、地において形を取り始めるという関係そのものが、創世の第三日の構造を映し出しています。

最後の日には、この天において完成した第七日の安息が地にも満ち、隔ては残りつつも、罪による断絶が完全に終わり、神がすべてにおいてすべてとなられる世界が現れます。すなわち、最後の日は、地における第七日の完成です。

■ Iコリント 15:3-4

「…キリストは、聖書に従って私たちの罪のために死なれたこと、葬られたこと、また聖書に従って三日目によみがえられたこと…」

■ ヘブル 4:9-10

「こうして、神の民には安息日がまだ残されています。
神の安息に入った者は、神がご自分のわざを休まれたように、自分のわざを休んだからです。」

補章3 御父と御子の栄光の共有と、花嫁に与えられる栄光の完成

創世の6日目に「われわれのかたち」と語られたとき、そこには御父と御子が創世前から共有しておられた一体の栄光が置かれていました。御子はその栄光を「父よ、あなたの栄光でわたしを輝かせてください」と祈られ、御父の愛においてご自身を捧げられました。

御子をご自身を捧げられたその愛こそが、御子の栄光の本質であり、命を与える支配の姿でした。この御子の栄光は、花嫁に与えられる栄光の原型です。花嫁は御子の愛を受け、その贖いの命を共有し、御子の愛を自らの愛として生きる者として形づくられます。花嫁が御子の愛に応答し、その愛を自らの栄光として輝かせるとき、花嫁は御子と同じ光に輝く者となり、御子の栄光と花嫁の栄光は一つの光として現れます。

この一体の栄光が花嫁において満ちるとき、創造の目的は完成します。創世記の第七日に象徴として置かれた安息は、御子と花嫁の一体の栄光が御父に返されるときに実体として現れます。御父と御子の一体の栄光が、御子と花嫁の一体の栄光として歴史の中に満ちるとき、世界は安息に入り、祝福され、神の栄光が全地に満ちます。

創造の御計画と贖いの御旨は、この一体の栄光の完成に向かって流れています。御父と御子が創世前から共有しておられた栄光と同じように、御子の栄光が花嫁において「完全な一人の人」として輝き（※7日目の前夜）、同一の栄光の存在として御子に結ばれるとき、神がすべてにおいてすべてとなられる世界が到来します。これが、創造の第七日に象徴として置かれた安息の実体であり、神の永遠の御計画の中心です。

■ ヨハネ 17:22, 24

「あなたがわたしに与えてくださった栄光を、わたしは彼らに与えました。…わたしが栄光を受けるために、あなたがわたしにくださったあの栄光を、彼らにも見させてください。」

■ エペソ 5:31-32

「それゆえ、人は父母を離れ、その妻と結ばれ、二人は一体となる。
この奥義は偉大です。私はキリストと教会について言っているのです。」

■ ハバクク 2:14

「地は主の栄光の知識で満たされる。」

補章4 ラキアの終末的成就——時と隔たりの象徴の終わり

創造の第二日目に置かれた大空は、天と地の区別を保つための境界であり、時を刻む秩序の舞台でした。太陽・月・星はその内側に置かれ、歴史を主の日へ導くしるしとして働きま

した。大空は時を刻む器であるだけでなく、時間そのものの象徴として置かれました。御子が来られ、永遠が歴史に介入されたとき、時を刻む必要は本質的に終わり、約束と成就の間にあった遅れは終わりを告げます。信仰の完成者である方が来られるからです。終末において大空が巻き取られるとは、創造秩序としての区別が消えることではなく、時間の象徴が役割を終え、時の遅れと霊的揺らぎを象徴していた領域、王たちの支配が閉じられることを示しています。

■ 黙示録 10:6

「もはや時がない（もはや時は延ばされることがない）。」

■ 黙示録 6:14

「天は巻物が巻かれるように消え去り…」

■ II ペテロ 3:10

「天は大きな音を立てて消え去り、天の万象は焼けて崩れ落ち…」

■ ヘブル 12:27

「揺り動かされるものは取り除かれるために揺り動かされるのです。」

補章5 時の終わりと安息——永遠の到来としての第七日

第四日目に置かれた時のしるしは、主の日へ向かう歴史の秩序でした。御子が来られたとき、時は満ち、永遠が歴史に触れました。終末において、時を刻む必要はなくなり、遅れも狭間も存在しません。

第七日の安息は、時が停止し、永遠が満ちる光景です。太陽も月も必要とせず、第一日目の光の本体がすべてを照らします。安息とは、神の臨在が満ち、時の流れが目的に到達した状態であり、創造の第七日に先取りされた永遠の実体です。

■ ガラテヤ 4:4

「しかし、時が満ちると、神はご自分の御子を遣わし…」

■ 黙示録 21:23

「都は太陽も月も必要としない。神の栄光が都を照らし、小羊がそのともしびだからである。」

■ 黙示録 22:5

「もはや夜がない。彼らは灯火の光も太陽の光も必要としない。主なる神が彼らを照らされるからである。」

補章6 新しい地の光——キリストと花嫁の一体の栄光

新しい地の光は、太陽や月のような代理光ではなく、キリストと花嫁の一体の栄光そのものです。御父の栄光を御子が本質的に輝かせるように、御子の栄光を一体の人が本質的に輝かせます。反射ではなく、共有された本体の光です。

新しい地は、キリストの栄光が直接に輝く場であり、創造の第一日目に現れた光が、完成の第七日に満ちる時として現れます。代理の光の役割は終わり、光の源が直接に地を照らします。

■ イザヤ 60:19-20

「もう太陽があなたの光となることはなく、月の輝きがあなたを照らすこともない。
主があなたの永遠の光となり、あなたの神があなたの栄光となる。」

■ 黙示録 21:23（再掲）

「神の栄光が都を照らし、小羊がそのともしびである。」

補章7 中間領域の終焉——揺らぎの消滅と判決の確立

創造の大空は、時の遅れと霊的揺らぎの象徴として働き、約束と成就の間の領域として存在しました。そこでは、神の聖に与る可能性と、敵対の影響を受ける可能性が共存していました。大空の内側は、約束と成就の間に置かれた揺らぎの領域であり、また霊的な立ち位置についていえば、裁きの確定していない未判決の時代でした。しかし、御子が来られ、復活と着座によって天において判決が確立されたとき、中間領域は本質的に意味を失いました。

終末においては、揺らぎは消え、遅れはなくなり、神の時は直接に実現します。新しい天と新しい地の間には、もはや揺らぎは存在せず、御子の臨在がすべてを満たします。

■ 黙示録 12:10

「我らの兄弟らを訴える者が投げ落とされた。」

■ ヘブル 2:8

「あなたは万物をその足の下に従わせた。

しかし今なお、万物が従っているのを見てはしません。」

■ Iヨハネ 2:8

「闇は消えつつあり、まことの光がすでに輝いている。」

補章8 被造物の贖い——朽ちるものが朽ちないものを着る普遍構造

朽ちる肉体が贖われなければ栄光に入れないように、俗なる地も贖われなければ神の臨在に耐えられません。被造物のうめきは、地が新しい地へと変えられることへの希求であり、身体の贖いと同じ構造を持ちます。復活の身体が朽ちないものを着るように、地もまた朽ちないものを着ます。

新しい地は、贖われた被造物が神の臨在に満ちる場であり、創造の目的が完成する場所です。朽ちるものが朽ちないものを着るという構造は、身体と被造物に共通するだけでなく、パウロが語った奥義—— 一体の完成 ——へと収束します。

■ ローマ 8:19-23

「被造物もまた、朽ちることからの解放を切に待ち望んでいる。」

■ Iコリント 15:53

「朽ちるべきこの者が朽ちないものを着なければならない。」

補章9 奥義としての一体——創造と完成を貫く中心線

創造の七日間に刻まれた象徴は、パウロが語った奥義の中心—— キリストと花嫁の一体 ——に収束します。

パウロが語った次の奥義—— 男と女の一体、ユダヤと異邦の一体、律法の隔ての壁の除去、キリストが内に住まわれること、復活の身体への変容—— これらはすべて、区別を保ちながら断絶が取り除かれ、一つの新しい人が形づくられる出来事です。

創造の区別は、一体の奥義を映すために最初から置かれた善なる秩序であり、断絶は罪によって生じた異物です。御子の裂かれた肉によって断絶は取り除かれ、創造の区別はそのままに、一体の関係が実体として現れました。新しい地において輝く光は、キリストと花嫁の一体の栄光です。御父の栄光を御子が本質的に輝かせるように、御子の栄光を新しい人が本質的に輝かせます。キリストと花嫁の一体が七日目の安息において実現します。

■ エペソ 2:14-16

「キリストは…隔ての壁を打ち壊し…二つのものを一人の新しい人に造り上げ…」

■ エペソ 3:6

「異邦人も同じ相続にあずかり、同じからだに連なり…」

■ エペソ 5:31-32（再掲）

「この奥義は偉大です。私はキリストと教会について言っているのです。」